
ゆとりろ！

雲丹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆとりろ！

【Nコード】

N2928M

【作者名】

雲丹

【あらすじ】

自称22歳の教師、篠塚さつき。いろいろと問題のある彼女の生徒はこれまた問題児揃い。妹の友達やら教員仲間やらも増えていつて、妙ちきりんな人々と共に、ちょっとおかしな日常を過ごします。ふとしたときに読んで、ちょっと笑っていただけたら幸いです。

作者多忙のため休載とさせていただきます。愛読して下さっていた方々には非常に申し訳ありませんが、場合によってはこのまま完結となる可能性もあります。ご了承下さい。

第1話 教師さつき

「……ちゃん！ おねーちゃん！ おねーちゃんってば！」

……んー。何か声がする。あたしが寝てたんだし多分朝なんだろう。あたしが眠いんだしまだ早朝なんだろう。そうに決まってる。まったく、朝早くから何なんだいったい。そんなひとりごとを頭の中で呟いてから薄目を開けると、そこには見飽きた……もとい見慣れた顔があった。

「んー……なんだよきい」

あたしがそう言つと、きいは呆れたような顔をした……もといしやがった。

「なんだよじゃないよー！ もう8時前だよ？ 早くしないと遅れちゃうよ」

「へ？」

そのきいの言葉に、恐る恐る時計を見てみると。

「7時38分……25秒……だと!？」

「細かいな」

「ちよ、なんで起こしてくんなかったの!」

「何度も起こしたよー！ ってか自分で起きなよー!」

「無理！」

「オイ」

ってこんな話してる場合じゃない！

あ、申し遅れましたがあたしは篠塚さつき。1……いや22歳です。さつきのは妹の季実、小2か3か忘れましたがそんな感じですよ。親は両方仕事で忙しく今は二人で暮らしてます。とりあえずそんな感じですよ。今はとにかく急がないと！

「いってきまー！」

そう叫んで家を飛び出し、バイクにまたがる。ポケットから無駄にでかいキーホルダーのついたキーを取り出し、差そうとしたところ。

「……コレ、チャリのカギやん」

取りに戻るのもめんどくさいし、どこにあるか見当はつかないし、っていうか時間ないし。

「あーもうー！」

仕方なく自転車で行くことにしよう。飛ばさないとヤバイ！

「うおらあああああ！」

すれ違ったおばちゃんが腰を抜かしたのが横目に見えた。

「ああ……間に合った」

時刻は8時20分。朝礼は8時半。いやホントにギリギリだったな今日は。ってか初日だけ。

息を整えながらふと前を見ると、髪がちょっと少なめのおっさんが近づいてきた。

「えー、篠塚先生でしたかな？」

「あ、はい。そうです」

できるだけ笑顔を作って対応する。なんか頬の筋肉つりそうなんだが。

「君も一端の教師なら、しかも新人なんだし、もうちょっと早く来なさい」

「あ、すみません先生」

「君も先生だろうが」

そう言ってから薄いおっさんは自分の席へと戻った。あ、言い忘れてたけどあたしの職業は教師。まあ型破りであることは自覚してる。でも今日が初日だしこれくらい……って一般的には初日こそ気合いを入れるべきなのか。

ま、いつか。

とりあえず教室に行くことにするか。たしかあたしの担当の教室は1ーDだったはず。1ーD、1ーDか……

どこにあるんだろ。

「すみませーん。1ーDってどこっすか？」

「D？ Dなら廊下の一番奥の教室だけど……え、なん」

「ありがとーございまーす」

自分のクラスぐらい知つとけつて文句を言われる前に逃走。職員室をさっさと出て廊下を歩く。文句とか聞いてらんないしね。A、

B、Cの教室を過ぎて突き当たりのD組に。よし、入るか。

……いや待て。普通に入っても面白くないだろ。ここは奇をてらつてテンション高めで……

「ハローウ！ エヴリワンっ！？」

「……え？」

拙い英語を叫びながら入室すると、なんと先に来ていた職員らしき人物と目があつた。その女性はこつちを見ると表情を変え、笑顔で近づいてくる。

「あら、さつき！ 久しぶりねー」

……ん？

「ていうかあんた変わってないわねホント。大体なんであんたが教員やってんのよ？」

えーっ……と。

「ちょっと聞いている？返事ぐらいしなさいよー」

「いや、あの……あんた誰？」

「え」

「あ、いや全く覚えてないわけじゃなくて！　なんか髪型とか見覚えが」

「髪型はこの前変えたばかりよ」

「そのメガネなんてホント記憶に」

「あの頃はコンタクトだったっつーの」

「……えーつと。……あんた誰？」

「あんたねえ……」

ハア、と目の前の知り合いらしき人物は大きなため息をつく。

「私よ私。優菜。杉沢優菜よ」

「杉沢さん……」

「あんたまだ思い出せないの？」

「いや、聞いたことはあるけど……あたし、あんたのこと何て呼んでたっけ？」

「えー!? ここでそれ言うの?」

杉沢さんは生徒を恥ずかしそうに一瞥して、あたしの耳元に近づいてきた。

「……にゃ」

「へ?」

「だから、うにゃって呼んでたでしょ」

うにゃ??

……あ。

「あああああ! うにゃか! うわー、久しぶりだねー!」

「ああはいはい。久しぶりね。さっき言ったろーが。ていうかあんた、自分のクラス行かないの?」

「何言っただよようにゃー。ここがあたしの管轄だよ?」

「……管轄って何よ。てかここは私のクラス。あんたはE組でしょ」

「え」

E組？ 突き当たりがD組なのにE組？

「E組ってどこに……」

うにやがスツと指差した方向には、渡り廊下でつながったボロっちい校舎が見えている。

「……あのすごいボロいところ？」

「そうよ。あんたちゃんとプリント見たの？」

「ヤギにやった」

「は？」

ああ……めんどくさいなあ、もう。なんであたしだけあんなボロ小屋でやんなきゃいけないのさ。

「あ、そうだ！ うにや、あたしとクラス交換しない？」

「できねーよ。ってか早よ行かんかい」

「ちえー」

仕方ない。E組行くかあ……。

さっきとは打って変わってトボトボと歩いてE組へ。中では生徒達が先生を待ちわびている様子。もう普通に入る。

ドアを開くとほぼ全員がこつちを見る。あたしは教壇に登って手に持っていた出席簿を机に置いた。

「はぁーい。皆さんおはようございまーす。あたしの名前は、篠塚さつき。どつぞよろしくー」

言い終わると、『よろしくお願いします』の声と共に、誰かの声
が。

「はい！ はい！ 先生ー！」

……何だあいつ。テンションたけえ。

「何？ えっと」

「日和です！ 日下部日和！ 元気が一番日下部日和でございます
！」

選挙活動ですか？

「じゃあ日下部さん。何かしら？」

「えっと、先生は何で遅れたんですか？」

「大人の事情です」

「じゃあ彼氏はいますか？」

「秘密です」

「いないんですね！」

「シバくぞてめえ」

「じゃあ、年齢はいくつですか？」

「……いくつに見える？」

「26！」

……このガキ。

「1……いや22だよボケ」

「えー？ 見えません！」

「てめえ！」

「篠塚先生！」

「は？」

声の主を探すと、そこには薄いおっさんが。

「教師たるもの、もう少し言葉遣いを考えなさい」

「あ、はい」

「あと声は小さめに。廊下に丸きこえです」

「はあ、すみません先生」

「だから君も先生だろうが」

なんかもう決まり文句みたいなきもちでそう言ってから去っていくおっさん。まあどうでもいいや。

「じゃあ質問タイムはこれで終わり。日下部は座れ。んじゃ、めんどくさいけど出席とるぞー。えー、愛葉」

「……………」

あら？ いない？

「初日からサボリとは何ともなめられたもんだねー」

「……………いるよ」

「へ？」

声が出た方を見ると、目つきの悪い女の子がこちらを見ていた。

「あ、いたのね。ごめんごめん。じゃあ次……………」

「遅れてすみません！」

「あ？」

その声と同時に突然ドアが開いた。見てみると、ポニーテールの

女の子が行きも絶え絶えといった風にしている。

あー、遅刻か。とりあえずここはいじつとかないかね。

「おいおい、初日から遅刻たあどついう了見だ？」

「先生は人のことを言えないと思います！」

「うっせえ！ えーつと。お前は誰だオイ」

「あ、すみません。私は桜馬……ん？」

「ん？」

女の子が顔を上げてあたしの顔をまじまじと見てくる。……いつたい何なんだ？

「あれ？ もしかしてさつき姉ちゃん？」

「は？ いやあたしにはあんたみたいな妹は」

「違う違う！ 私よ！ 乙香^{いづか}。小さい頃近くに住んでたでしょ」

は？ こいつは何を言ってる……あ、そんなやついたようないなかったよな。ってかそれが本当なら、あたしのある重大な『秘密』がバレてしまう危険性がある。

よし、ここは他人のフリをしよう。

「え？ アナタ誰デースカ？ アタシ日本キタバカリデチヨトワカ
ンナイヨオ」

「さつきちゃん、何言ってるの？」

「イヤアタシ最初カラコノシャベリカタダッタヨオ」

「まるで密入国した中国人みたいだよ」

「……なんか日下部にツッコミされると屈辱的だな。そんなことを考えてる時に、

「で、さつきお姉ちゃんであってるのよね？」

とか乙香に急に聞かれたもんだから、

「あ、うん」

って普通に返しちゃったよ。

「あっ！ いや今のは」

「ホントに？ さつきお姉ちゃんが担任なんて嬉しいな」

「だろ？ ま、困ったことがあれば何でも言えよな」

「うん！」

「……何言ってるんだ、あたし……」

初日がこんなんで、これからやってけるんだろうか、とか不安になつたあたしダッタヨオ。

第2話 18歳さつき

「はぁ……」

どうも、さつきです。朝礼とHRは終わり、現在帰宅時間です。そろそろと生徒達が帰っていく中、あたしは教壇に肘をついて頭を抱えています。

あー、頭痛がする。心配し過ぎで頭痛だなんて、あたしもやっぱりまともな人間なんだな。良かった良かった。

「良くねえよ……」

「どしたの？ さつき姉ちゃん」

「あ、いや……」

心配の種はこの生徒、桜馬乙香。昔からの知り合いってのは別に悪いことではないんだけど、あたしにもいろいろと知られたらまずいことが沢山あるわけで。かなりまずいことなわけで。

「さつき姉ちゃん、教師になったんだね。似合ってると思うよ」

「お、おお。ありがとう」

「ってかさつき姉ちゃん、たしか私と6つ違いだから……」

「あー！ いやいや乙香、ホント久しぶりだよな！ 久々だしちょっとうちでも来るか？ 季実もいるぞ？」

「ホント？ やった！ 行く行く！」

あーホント、ヒヤヒヤさせるな……。いや、乙香は何も知らないから悪気は無いんだろうけどさ。これからこんなこと続けていかなきゃならないって考えたらちよつと憂鬱だ……。

まあ仕方ない。これはちよつとズルした罰ってことで甘んじて受けるか。それに考えたってどうしようもないしな。

「よし、んじゃ行くか」

「うん！」

「ちよーっつと待ったア！」

「あ？」

教室を出ようとした時、教室から呼び止める声が。ってかこの声は……

「げ、日和」

「ちよ、げって何よげって」

「日和おんなじクラスだったのか……」

「そだよ！ 喜べ！」

「無茶言つなよ」

なんだこいつら知り合いか。あながちおんなじ小学校ってところか？

「ってかいつちゃん、さつきちゃんと行くの?」

「オイ、誰がさつきちゃんだ」

「うん、そだよ」

……あたしのツッコミはスルーかよ。

「じゃ、あたしも!」

「何を!??」

「え、私はいいけど」

「いいでしょ? さつきちゃん! 一人の生徒だけ特別扱いしちゃうダメなんだよ?」

「くっ……」

「まあいいじゃん姉ちゃん」

「いいじゃんいいじゃん!」

「お前はうるせーよ」

でも仕方ないか……。たしかに一人の生徒だけ特別扱ってのはまずいしな。

「しゃーねーな。特別だぞ?」

「特別扱いはダメなのよね」

「じゃあどうすりゃいいんだよ!」

「まあまあ、2人とも落ち着いて」

「なんやかんやと言いながらも結局3人であたしんちに帰宅するこ
とに。」

行きは上り坂ばかりで苦しい学校への道のりだけど、帰りは下
り坂なので自転車だとかかなり楽。ゆっくりめに帰っても2、30分
で家に着いた。

「ただいまー」

「おかえりーってあれ? 誰その2人?」

「あー、えつと生徒」

「え?」

「わー! 季実ちゃん久しぶりー!」

「え、あ、あの……誰?」

「ひどい……忘れちゃったの!? あたしのこと! あたしは遊び
だったのね!」

「うるさいわよ日和。久しぶり、季実ちゃん」

「あ、乙香ちゃん！ 久しぶりだねー！」

「覚えててくれたんだ！ 良かったー」

きいと乙香が会話を始めたため、取り残されたあたしは自分の部屋に戻ることに。部屋に入るととりあえず椅子に座ってタバコをくわえて火をつける。

「ふう……」

「さつきちゃん、タバコは体に悪いからダメなんだよ？」

「てめえ日下部……勝手に入ってくんなよ」

「あ、日和でいいよ」

「今はその話じゃねーだろ」

言ってから煙を吐き出す。ああ、落ち着く。もうほとんど中毒になっちゃってるからなあ。約2年前から吸い始めて、今や1日1箱はほとんど当たり前になってる気がする。

そんな感じでタバコをふかしていると、ノックの音が。

「どーぞー！」

「なんでお前が答えてんだよ」

「入るよー……ってさつき姉ちゃん何でタバコ吸ってんの！？ 未成年なのにー！」

「ぎゅん」

「あーあ、ダメじゃんお姉ちゃん」

「へ？ 未成年？」

上からあたし、きい、日和の反応。まあ、なんとというか……

普通、だな。

って落ち着いて言ってる場合じゃないだろ！ まあ多分もう皆さんお分かりでしょうがあたしのホントの年齢は18歳。言ってみれば年齢逆詐称ですね。そんなんするやつ普通はおらんわな。

「え、でもさつきちゃん、22歳つつつてたじゃん」

「でも私が小学校に入るときにちょうどさつき姉ちゃんが中学生になったところだったよね？」

「あー……えっとそれはだな……」

「……もう言っちゃえば？ お姉ちゃん」

……はあ。しゃーないか。最後まで隠し通せるとは思ってたなかったけど、初日でバレるってのは想像してなかったなあ。

「まあ、その、なんつーか、実はあたしは普通の人間じゃないんだ
よ」

「オイ」

「えー！？ まじかよさつきちゃん！」

「シュツカーに改造された仮面ダイバーなのだ！」

「なんでやねん」

「ダイブすんの！？ 日本海とかに！？」

「残念ながらあたしは瀬戸内海担当です」

「すっげえー！」

「タコとか取ります」

「すっげえー！」

「それただの海女さんやん」

んー、なんとというか、きいのシッコミはいいなあ。そんで日和は馬鹿すぎるだろ。

「で、ホントの理由は何なの？」

「ぐっ……」

「え！？ 今の嘘！？」

「お姉ちゃん、早く言いなよ」

「……はいはい。言うよ言うよ。まあ言ってみりゃ働くため。教員になるにゃあ年齢ごまかさなきゃダメだったんだよ」

「なるほどね」

「それじゃ、教師になりたかったのは何で？」

「いや成りたかったっていつか成らざるを得なかったというか」

「じゃあタバコ吸ってんのは何で？」

「いやコレは……その……うまいし」

「じゃあ彼氏が出来ないのは何で？」

「そりゃやっぱりガサツだし男勝りで強い……」

「じゃあじゃあ……っていつちゃん止めてよね！」

「知らないわよ」

「きいも止めるよ！」

「知らんわ」

「なんだよ……つつこめんじゃんかよ」

「いちいち反応してたらキリないわ！」

「なんで関西弁なんだよ……」

いや別にいいんだけどさ。

まあとりあえず釘を指しとくか。

「この流れで行ったらもうわかると思うが、とりあえず日和。お前はどっしたらいいかわかるな？」

「もちろんだよさつきちゃん！」

「ほづ。じゃ言ってみ？」

「まず放送室に行く」

「はい失格」

「ちょ！ 待ってここからだから！」

「ここからって何なんだよ。マラソンの大会やってんじゃねーんだぞっ。」

「いや今のツッコミはどうかなー」

「うっせえ！ ツッコミはきいの仕事だったの」

「なんでやねん」

「またなんでやねんかよ。お前なあ、もうちょっとレパートリー増やせよ」

「えー。めんどくさいよー」

えっ……

「……そんな冷たいこと言っなよ」

「もー！ そんなことどうでもいーの！ あたし話を聞かんかい」

「ああ……はいはい」

こいつなんでこんなにうるさいんだよ。

「だからさ、放送室に行って言うわけ。さつきちゃんは18歳じゃないぞー！ って！」

「いや……それは逆に怪しすぎるだろ」

「いやその逆に怪しくないかも！」

「その逆って何だよ」

「えー。ダメ？」

「ダメに決まってるんだろ。ま、とりあえずお前ら二人とも、誰にも言っなよ？」

「はいはい」

「よし。乙香はいい子だ」

「だが断る」

「よし。日和はくたばれ」

「あー、そんなこと言っているのかなー？」

「コイツは……。あ、そうだ。」

「オイ、日和。あたしの担当教科知ってるか？」

「何？ 急に……。英語でしょ？」

「そ、英語。もしも誰かに言ったら、英語の単位は無いと思え」

「えー？ ちょっとさつきちゃん！ それは卑怯だよ！」

「言わなきゃいんだよ、言わなきゃ」

「えー……」

ふふふ……

職権濫用って最高！

「……なんでやねん」

第3話 お料理さつき

「おねーちゃん、ホントにやるの?」

「おう。きいは宿題でもしとけよ」

「こんばんは。季実です。」

時刻は午後6時、夕食を作る時間なのですが、なんとお姉ちゃんがキッチンに立っているんです。

なんでこんなことになったかというと

「ただいまー」

午後5時半。そろそろ夕食の準備を始めようという時間に、お姉ちゃんが仕事から帰ってきました。

「あ、おかえり。お風呂沸いてるよ」

「ん、あんがと。晩飯なに?」

「それがまだ決めてないのよー。どっしよ……」

「……ふむ、なるほどね」

「へ?」

なんとなく、なんとなくだけど……お姉ちゃんが何か良からぬことを考えてる気がする。

「よし、決めた！」

「……決めたって何を？」

「今日はあたしが夕飯作る！」

「え、お姉ちゃんが？」

「おうよー！」

お姉ちゃんが料理か……しているとほとんど見たことないなあ。前はお母さんが作ってたし、お母さんがいなくなっただけからは私が作ってるし。大丈夫かなあ……

「お姉ちゃん、料理できたっけ？」

「まあ調理実習とかもやってきたし、大丈夫だって」

「ホントに大丈夫？」

「ホントホント。心配すんなって」

こんな次第なわけです。

心配すぎて仕方ないのですが、もう言い出したら止まらないからなあ。私はとりあえず火事にならないように見守っておこう。

「あ、そういえばお姉ちゃん、何作るの？」

「ふふふ……ないしょー」

「えー！ 教えてよー」

すごい恐いのよ！

「まあ食えるもんは作るからさ」

食えるもんは、って……台所で食べるもの以外に何を作るのよ。

「ふんふふーん」

鼻唄混じりに料理を始めるお姉ちゃん。お姉ちゃんが包丁を持つと悪寒が走るのはなんでだろう。

「あ、そうだ。砂糖と塩を間違えるなんてベタなことしないでよね」

「佐藤俊男？」

「誰だよそれ。違うよ！ 塩と砂糖を間違えんなって言ってるの！」

「そんな言い方せんくても……ってかあたしを何だと思ってんの？ 英語教師だよ？」

そう言いながら『SALT』『SUGAR』と書かれた半透明の箱を取り出すお姉ちゃん。

「もちろん、こっちが塩！」

「……え」

そう言いながら『SUGAR』の箱を指差すお姉ちゃん。

「……お姉ちゃんって、何教えてんだっけ？」

「ん？ 英語」

お姉ちゃんに習ってる人、すごいかわいそうだなって切実に思っ
ちやっただよ。

「違うよ！ これは砂糖、こっちが塩でしょ」

「えっ！？ あ、いやもちろんわかってたよ」

「さっきこっちが塩って言ったじゃん」

「いや……あつ、さっきのはボケ」

「うそつけ！ まったく。とにかく、塩と砂糖は間違えないでよね」

「はいはい了解」

ホントに返事だけはいいいんだから……って母親みたいになってん
じゃん私。

返事はいいけどやっぱり心配なのでお姉ちゃんを監視しておくこ
とに。何をしでかすかわかんないからね、この人は。

「えーっと、フライパンフライパン……あ、これこれ」

へえ、フライパン使っつてことは炒め物……ん!?

「ちょ、ちよっとお姉ちゃん、それ何?」

「ん? いやサラダ油」

「どこがだよ! それ灯油だろうが! どっからもってきたんだよその缶は!」

「え? いやサラダ油も灯油も変わらんだろ。油だし」

「変わるよ! バカか!」

「バカつて……いやそうだけどさ」

素直だな。

でも今のは言い過ぎたかも。

「ごめん、ちよっと言い過ぎたよ」

「いやいやいいよ。いいツツコミが来ればボケがいがあるからね」

「そっか、良かった……ってわざとかよ! ちゃんとやれよ!」

「ナイスツツコミ!」

「お姉ちゃん!」

「はいはい。ごめんってばー。ちゃんとやるから」

そう言うてからはお姉ちゃんも危なげなく料理を進めました。ほどなくして料理は完成。二人とも席について食べることに。

「チャーハンかぁ。ま、見た目はいいね」

「見た目はって何だよ。まあ食べてみ？」

「じゃ遠慮なく。いただきますーす」

「まずー一口ぱくり。」

「……ん？」

「..っびび」

「いや、これは普通に……」

「なんだよ普通かよー」

「いや、普通にまずい」

「なんでやねん」

「いやボケてないから」

「え、まじで？」

そう言うてからお姉ちゃんも一口ぱくり。

「舌が縮んだ」

「毒薬でも盛ったんじゃないの？」

「あたしの真心はつめたけど」

「ああ、やっぱり」

「なんでやねん」

こんな感じで今日も一日が過ぎていきましたとち。

第4話 ある日の日和

「おっはよーうございます！」

ドアをガラツと開け全力で叫ぶあたしは超プリーティー女子中学生、日下部日和！ たしか13歳……いや12？ いや13……じゃなくってまだピチピチの12歳！ そして男どもが一瞬で釘付けになる予定の長めに伸ばしかけの髪を振り回しながら激しく時計を見る！
只今午前9時！

「はよ席つけや」

「……はい」

この人は年齢詐称教師のさつきちゃん。22歳のくせに18歳のふりをしてるのだ。……あ、違った逆だったのだ。

「お前なあ、遅刻したのにどんだけ元気よく入って来てんだよ。もうちよい申し訳なさそうに入ってこいや」

「いや、申し訳なく思っでないんで無理なのだ」

「しばくぞお前」

「英語で言つと？」

「ファックユー」

なんかすごい雑な英訳な気がするのはいただけだろうか。

「まあめんどくせーし説教もどーでもいいや。じゃ、次10ページ開いてー」

「さつきちゃん！」

「お前なあ、その呼び方……もういいかめんどくせー。で、なんだ？」

「教科書忘れたら」

あ、さつきちゃんの教科書が丸まって

「いたっ！ 暴力反対！」

「遅刻した上に教科書忘れたんだ。当たり前だろ」

「教科書忘れてないよ！ 忘れたら、って言ったの！」

「なんでそんなことわざわざ言うんだよ！ あー、もう疲れた。こんなやつ相手にしてられん。もうみんな10ページ開いてー」

「さつきちゃん」

「知らん」

ホントに相手にされなくなっちゃったよ。

「仕方ない。いっちゃんの相手でもしてやるか」

「うるせーよ」

このツンデレ少女は桜馬乙香ちゃん。ホントはあたしのこと大好きなんだよ？ 小学校1年の時からの付き合いで、なかなか可愛いけど、あたしには劣るかな。

「まあまあそう言わずに」

「ってかあんたねえ、今授業中だよ？ 後ろ向いて話しかけてこないだよ」

「大丈夫だって。さつきちゃんだし」

「そんなこと言ってたらまたしばかれるよ？」

「そうだったら例のことを言えばいいんだよ」

「えー、日下部日和、態度点マイナス100点」

「ちよつと待ったあああ！」

「なんだよ」

「いやマイナス100点ってテストで何点とっても成績は0じゃん
」！

「そーだよ。まあ2、30点も0点も変わらねーからいいよ」

「あたしはよくないよー！」

「でも平均点の計算とかめんどくせーし、0でいいじゃん」

「そんなこと知らないよ!」

「どんだけ自由奔放な教師なんだよ!

「じゃあこの問題に答えたらチャラにしてやるよ」

「ん?」

「そう言ってさつきちゃんが指差した先にはたしかに問題らしきものが書いてある。」

「えーと、なにになに?」 『Is this a pencil?』

「……『これは鉛筆ですか?』だっけな。その文章の下には鉛筆らしき絵が描いてある。ってことは……」

「えーと、『Yes, it is』かな?」

「はい、ブー」

「ええ!?! 何で?」

「何でもクソもねーよ。まるまる答えが違っじゃねーか」

「へ? いや、だってそれ鉛筆でしょ?」

「お前バカかよ。これのどこが鉛筆なんだよ。こりゃどう考えてもちくわだろっつが」

「ち……ちくわ!?! え、いやそんな細いのにちくわ!?! 絵心な

さすがでしょ！　つてかちくわを英語で何て言うかなんて知らないよー！」

「そんなあなたも知らんわ」

「ええ！？」

めちやくちや過ぎる！　つていうかこの人ホントに教師か？

「さつきちゃん、もうちょい簡単な問題にしてよ」

「ったく、わがままだなー。じゃ、これを和訳してみ？」

そう言われてまた黒板を見ると、たしかに英文が書いてある。

「えーっと。ライクってなんだっけ？」

「好きだってことだよ」

「なるほど、わかった！　私は、私の英語の先生が好きです」

「あ、やっぱり？」

「今のは誘導尋問だ！」

「尋問してねえよ。じゃ、次のを乙香」

「はい。えっと、私は日和のことが好きではありません」

「ええ！？　何の話！？」

「いや、だって前に書いてあるんだもん」

「へ？ あ、ホントだ。ってオイ！」

「はい、それじゃみなさんリスアンドリピート！ 『I do
n't like hiyori』！」

「『I don't like hiyori』！」

「ちょっとみんなまでひどっ！」

そんなわけで、今日も1 Eは元気です。

第5話 しっかり優菜

こんにちは。優菜です。あ、杉沢です。えっと、杉沢優菜です。……うにやです。現在昼休みで、休憩室でさつきと2人で座ってます。

私は数学教師してて、さつきとは中学の時の同級生。年齢はなんと18歳！ 実は中学卒業後、海外留学して飛び急、早くも教員免許を取れちゃったわけなんです。ところ。

「ずっと思ってたんだけどね、さつき。なんであなたがここで働いてんのよ？」

「はあ？」

そう、さつきも言ったとおりさつきは同級生。つまり18歳のはずなんです。なのに教員やってる意味がわかんないんです。

「そんなふうにやも一緒じゃん。どーせ年齢ごまかしてんでしょ？」

「んな訳ないでしょ？ ちゃんと教員免許とったわよ」

「うっそおー！？ どうやって？」

「あんだねえ……あたし海外留学したでしょ？ 飛び急してとったのよ。ってかあんだまさか、教員免許なしでやってるわけ？」

「もちろん」

はあ……あきれた。どんな方法かと思えばまさか無免許とは……

「それ、犯罪よ？ わかってんの？」

「後悔はしている。反省はしていない」

「怒るわよ？」

「女の又の心る？」

「意味わかんないわよ」

まったく……中学の時から変わってないじゃない。ってかむしろ悪化してる気がする。あ、そういえば。

「どつやってここで働けるようになったのよ？」

「いや、だってここの中学の校長……」

「あ、そっか……そりゃいけるわ」

「でしょ？」

あんまりこの話には触れたくない。昔を思い出すのは、特に中学時代を思い出すのは絶対に避けたいからね……。

「ま、そんなことごとくでもいいじゃん。それよりさ、うにゃ。今晚空いてる？」

「今晚？ 空いてるけど……」

「ホント？　じゃ、うち来なよ！」

「さつきんち？　どうしよ……あんだ1人暮らしだっけ？」

「んにゃ。妹と2人」

「妹？　あ、きいちゃんか。久々にきいちゃんにも会いたいし、行こっかなー」

「やった！　じゃ、仕事終わったら職員室残っててね」

「わかったわかった」

きーんこーんかーんこーん。

「あ、チャイム鳴った。さてと、テキストに終わらせてきますか」

「ちゃんとやんなさいよ！　まったく……」

さてと、私は5時間目は……

「げ、E組じゃない」

「げって言うなよ。あたしのクラスだぞ？」

「だってさ、あんだのクラス変わり者多いよ。あの、日下部とか」

「あいつは別格だ。他はまともだろ？」

「いや、そうでもない気がするんだけど……」

ちよつと憂鬱ぎみになりながらも、諦めて授業に向かうことに。
はあ……数学って寝る子多いんだよなあ。

午後5時。

「それじゃ、そろそろ上がらせてもらいます」

帰る先生がちらほら出てきたところで、私とさつきも帰ることに。

「ちよつとコンビニ寄って帰る」

「うん、構わないけど」

さつきのそんな要望もあってコンビニに寄って帰ったため、さつきの家に着いたのはもう6時を回ってました。

「ただいまー」

「おかえりー。あれ？　またお客さん？」

「久しぶり、きいちゃん」

「あっ！ あのー……そう、うにゃさん！」

「うにゃさんって……」

そう呼ばれるのはちょっと複雑な気分ね。

「まあまあうにゃ。どーでもいいから早く上がってよ」

「はいはい」

「どろどろどろぞ。あ、今日の夕飯、おでんなんですけどいいですか」
「？」

「全然いいわよ……って、きいちゃんが作ってるの！？」

「はい、お母さんいないし、お姉ちゃんはアレなんで」

「アレってなんだよ」

「あー、アレね。っていうかきいちゃん、私の妹にならない？」

「えー？ どうしようかなあ」

「オイ、きいはやらんぞ。きいがいなければ誰が飯を作るんだ」

「自分で作りなさいよ」

「いや、あの料理は我ながらまずい。絶対に無理だ」

力強いな。

「2人とも立ってないで座って座って。おでん温めるよー？」

「おう」

「ありがとう、きいちゃん」

きいちゃんはコンロのスイッチを入れ、コップやお箸、お皿を配ってくれる。なんて出来た妹なのかしら。

「それに比べてこの姉は……」

「なんだよつにゃ」

「あんた、ちょっとはきいちゃんを見習いなさい！」

「ええ……やだよ」

「オイ」

そんなやりとりをしているとキッチンからきいちゃんの声が。

「お姉ちゃんたち、ご飯食べる？」

「あー、いらんいらん。これがあるからな」

そう言ってさつきがコンビニの袋から出したのは缶の飲み物。

「なにそれ？」

「何ってあんだ、ビールに決まってんじゃんよ」

「あんだねえ……飯にも未成年なんだし、未成年らしくしなさいよ」

「飯にもってなんだよ。別にーじゃん、細かいこと言っただの」

「まったくあんたはホントに変わんないわねー」

「はい、お待ちどうぞさまー」

そう言っただけでちよっと小さめの鍋を持ってきいちゃんがやってきた。

「ありがとう、きいちゃん。わ、おいしそー！」

「よし、食つか」

「いただきます」

とりあえずちくわを一口ぱくり。

「おいしい！ 味がよく染みこんでるよ」

「ホント？ 良かったー」

「そつえばね」

「ん？」

「ちくわって英語でなんて言つか知ってる？」

「ちくわ？ なんだっけな……ってか何でいきなりそんな話になんのよ」

「いや、わかんないなら別にいいよ。それよかビール飲まないの？」

「え、どうしよっかな」

「えー！？ うにゃさんビール飲むんですか！？」

「へ？ きいちゃんいきなりどうしたの？ 私、前は結構飲んでたんだけど、忘れちゃった？」

「いや、覚えてるから怖いんです……」

「？」

なんかよくわかんないけど、きいちゃんの顔はちよつと青ぞめて
いる。

「ま、一杯だけいただこうかな」

「ん、そう？ ま、グイッといっちゃって」

「いただきまーす。あー、おいしいー！ おいしい……ふえ」

季実です。私の横ではビール一杯で出来上がってしまったうにゃさんが何か言ってます。

「お前らよお、数学ってアレ、なんで意味ねえのに勉強すっかわかるか？ 知らねえだろ？ んなことあたしも知らんわ！」

なんでキレてるんだろう。

「てか2つて可愛いよねー。まあ5も捨てがたいけど。3と8はアレ卑猥だからダメね」

何言ってるのか全くわからない。ホントに意味不明だ。

「もー、お姉ちゃん。こうなるってわかってて何で飲ますのよー」

「いいじゃん面白いし」

「面白くないわよー！」

「だからさあ、方程式って何っていつてんのよ！ 方と程と式が合体する意味がわかんないものの」

「ものって何!？」

「うつせえよおめえ……きい……じゃなくて妹」

「バカかお前。妹のことを妹って呼んでるやつなんざいねえよ」

「うりゆせえポップコーンがー！」

「ポップコーン!?!」

「なんだとごまだれ!」

「ごまだれ!?! ポップコーンにごまだれ!?!」

「あ、無理。負けだわ。ごまだれ出たら負けだわ」

「じゃあつにゃさんがごまだれ言えば良かったんじゃ!?!」

「ダメだよおめー、最初はごまだれ言えねーんだよ」

「じゃあ先に言ったら絶対負けじゃん! 何この勝負!?! 不毛すぎるでしょ!」

「もうお前アレだよ……あの……ごまだれ」

「え!?! 私の負け!?!」

「ぐう」

「すぴー」

「寝た……!?!」

「もういいや……私も寝よう。」

「おやすみなさい。」

第6話 宿題季実

こんにちは、季実です。只今日曜日の午前11時。私は部屋で宿題しています。

「えっと、にく……にく……」

「……おはよう」

「あ、お姉ちゃん。おはよ」

日曜日のお姉ちゃんはだいたい10時以降に起きてきます。毎日私が起こしてなかったらどうするんだろ……

「何やってんの？」

「宿題だよ。えっとにく、にく」

「肉？ 肉はこう書くんだよ」

「ちげえよ。なんで算数ドリルに漢字書くところがあるんだよ」

「知らねえよそんなの。そういうドリルなんだろ？」

「違うわ！ 斬新すぎるだろ！ 意味わからんわ！」

「うるせーな。じゃあなんだよ」

「九九だよ九九。にくはいくらだっけ？」

「たしか100グラムでサンキュッパぐらいだっけ」

「肉から離れるや！ 2かける9がいくらか聞いてんだよ！」

「口悪いなあ……ってかお前、そんなんもわからんの？ ガキだねえ」

「はいはい。ガキで結構だから教えてよ」

「そんなの……えと、じゅう……18に決まってるんだろが！」

「あれ？ 今ちよつと迷わんかった？」

「は？ いやいや迷ってないし」

「いや迷ったでしょ？」

「いやいや何いつちやってんの？ 迷ってるとしたら人生にだよ」

「いやそれはそれでダメだろ！ てかむしろそっちのがダメだろ！」

「お前うつせーなー。だいたい九九なんざ小2で完璧だったっつーの」

「……へえ」

「オイ、なんだその目は？ もしかしてあたしのこと疑っちゃったりなんかしちゃったりしてるわけ？」

「ちゃったり多いな。ま、全く信じられないわけではないんだけどね」

「なんだその言い方は？ そんなに言うんなら証拠を見せてやるよ。ほら、何でも問題出してみ？」

「いいの？ 後で後悔しても知らないよ？」

「しねえよ」

というわけで、なぜかお姉ちゃんへの問題タイムに。

ああ言ってみたけど、お姉ちゃんでもさすがに九九は覚えてるでしょ。ってか覚えてほしい。

「んじゃいくよ？ いんにが」

「こー」

「にんにが」

「しー」

「さざんが」

「オールスターズ！」

「ん！？ 今なんて言った？」

「……く、だよ。9だよ」

「いや、ちがうこと言った気がするんだけど……まあいいや。次いくよ。しにが」

「はち」

「しわ」

「しわだあ？ しわなんかねえつつうの！ あたしはまだ18だぞ！？」

「いや何の話してんの！？ 九九だつつてんでしょ？」

「あ、ああ。そっか。しわ……しわか。さんじゅうに」

「まったく……」

最近のお姉ちゃんは年齢の話とかに敏感すぎる気がするんだけど、何があったのかは聞かない。いや、聞けない。怖い。

「じゃ、次いくよ？ えー、『じ』」

「テイ」

「え？」

「……『じゅい』」

「……？」

「どした？」

「あ、いや。次は、えと、ろっく」

「オン！」

「へ？」

「……いや、じゅっろくです」

「はー？」

「んー？ いやいやいやじゅっろくです」

「……うん。じゃ、しちは」

「じゅっろく……じゅっろく……じゅっろく……」

「……正解。じゃ、はっぱ」

「カッター！」

「っっ」

「……ろくじゅっ」

「うん。じゃ、ラスト。くく？」

「はちじゅっいちぐらい」

「うん。まあ正解だね」

「……おい」

「何？」

「つつこめよー！」

「へ？」

「いや、へ？ じゃなくて！ ツッコミをしるよ！ お前の仕事だろっがー！」

「いや、めんどくさかったし。ってか途中からボケを狙ってんの見え見えだったし」

「そんなこと言わずにしてくれよ！ 頼むよ！」

「いや、いいけど……」

「じゃ、ツッコミしろよ？ 今からボケるから」

「あ、うん。どっぞぞ」

なんか知らんが今度はツッコミしてほしいのでお姉ちゃんへのツッコミタイムに。なんか今日はお姉ちゃんが好き放題やってるな……。ま、そんなに言うからにはツッコミするか。見ているとお姉ちゃんは鳥っぽい格好を言った。

「ぽっぽーはとぽっぽー」

「ん？ えっと……」

「ぼっぼーはどぼっぼー」

「あの、えと」

「ぼっぼー！ はどぼっぼー！」

「な、なんでやねん！」

「……うん」

……うん？

「まあいいや。そんじゃ」

「え？ あれ？」

すごい納得してない感じで出てっちゃったんだけど……

「鳩じゃなかったのかなあ……」

うーん……

まあいいか。宿題やる。

第7話 狩人さつき

「狩りに行くこーぜー!」

「……はあ?」

こんにちは、季実です。土曜日の午前9時現在、意味不明なことを言ってるのは姉のさつきです。

「きい、わけわかんないこと言いやがって、って思ってるだろ?」

「うん」

「……お前は どうして そう正直なんだよ」

どうしても言われましても。

ちよっとへこんだ様子のお姉ちゃんだったが、すぐに先ほどのテンションに戻った。

「よく聞け、きい。狩りと言ってもだな、鹿とかを狩るわけじゃない」
「い」

「うん」

「つまりだ、紅葉狩り行こーぜー!」

「あ、紅葉狩りかあ。いいねー」

まあ、狩りっちゃ狩りだけど……ってもしかして。

「お姉ちゃん、紅葉狩りって紅葉を刈り取りまくることだと思っ
ない？」

「お前バカにするのも大概にしるよ？　んなわけねーだろ」

「そつだよね。ごめんごめん」

お姉ちゃんもそこまでバカじゃないよね。

「あ、あとオヤジ狩りもしようかと思ってる」

前言撤回。やっぱりバカだね。

「いやダメだろ」

「なんでさ」

「犯罪だからだよ！」

「それがよくわかんねーんだよな。なんでオヤジ狩りが犯罪なんだ
よ。それじゃあたし毎日犯罪者じゃん」

「毎日そんなことしてんの!？」

「いや、してるってか、せざるを得ないってか……」

「オヤジ狩りをせざるを得ない状況ってどんなんだよ!？」

「だって職員室にもいるし」

「教師！？ 教師にやっちゃったの!？」

「いや、だって見えちゃうじゃん」

この人何を言っ……まさか。

「お姉ちゃん、オヤジ狩りの意味知ってる？」

「そりゃ知ってるよおめー。紅葉狩りが紅葉を眺めることなんだから、オヤジ狩りはオヤジ眺めることだろ」

「いや、おま、いや、何て言ったらいいかな……うん、そう。なんでやねん！」

「ええ？」

本気で意外そうな顔をするお姉ちゃん。本気だ。この人、本気と書いてマジだ。

「オヤジ狩りがオヤジ眺めることなら何で世間で問題になるわけ？」

「『うわっ、あの人才オヤジ見てるし。チョーヤベーし』みたいな感じだろ？」

どんな感じだよ。

「違うよ！ オヤジ狩りってのはオヤジを襲って金とかをたかると!！」

「あ、なるほど。どっちにしてもやったことあるわ」

「オオオイ!!! ダメだろ!」

この人何いつちやってるんだ!?

「オヤジつつつてもアレだぞ? うちのオヤジだぞ?」

「あ、そっか。それなら別にいいか」

これはまあ仕方ないことなんですよ。うちの父親はちょっと変な
んで。

「というわけでまあ、紅葉狩り、行こーぜ!」

「うん、行きたいのは山々なんだけど」

「うん」

「今何月だっけ?」

「5月だよ」

「紅葉っていつのものだっけ?」

「秋だろ」

「じゃあ見れねーよ」

「あ、そっか。じゃあしゃーない。ゲームやろーぜ」

「あ、うん」

なんか知らんが、まあいつか。

第8話 友人日和

今日も元気にこんにちわ、日和です！

今、昼食が終わって昼休み。暇そうないっちゃんとともに暇な時間をご過ごしてます。ってか暇です。

「とゆーわけで！」

「何よいきなり」

「そんな嫌そうな顔せんでも」

「今寝かけてたのよ」

あ、なんで瞑想に耽ってるのかと思ったら寝てたのか。

「こりゃ一本とられたわい」

「黙れよ」

「そげな言い方せんでも」

「どこの言葉だよ。んで何なの？ 大声出して」

「あ、そうそう。いやね、このクラスになってもうそこそこ経ったのに周りの人のことあんまし知らないなあって思ってたさ」

「なるほど。ま、周りはおんたのこと知ってると思うけどね」

「へ？　なんで？　あたしってばそんな人気者？」

「人気者って言うか……有名ではあるけどね。すごいバカってことで」

「ええ！？」

バカかあ……まあいろいろやっちゃったし仕方ないかあ。

「ま、有名なら何でもいいや」

「あ、いいんだ」

「でもさ、あたしは周りの人のことを全然知らんわけよ。だからやっぱ知るところってことで、みんなにインタビュー！」

「ふうん。いつてら」

「いやいやいやいや。もちろんいつちゃんもだよ？」

「なんでもちろんなんだよ」

「そりゃ決まってるじゃん。ツッコミが必要だからだよ！」

「どーん、といつちゃんを指差してみたけど、いつちゃんは全く微動だにせず。」

「いや、別にいらんくね？」

「いるに決まってるよ！　ねえ？」

とりあえず隣にいた知らない子に振ってみた。

「え、あ、うん」

「それ誰だよ!?!」

「ほら、やっぱりツッコミ必要じゃん」

「いや、ツッコミというよりあなたの暴走を止めるためについていくわ」

「まったく素直じゃないなあ」

「これ以上ないほどに素直だよ」

「えっと、あの……」

「ん?」

なんかさっきの子が横でもジモジしてる。

「私はどうすれば?」

「あ、いやいや別に」

「いつちゃんストップ! あなたにはボケてもらいます」

「急すぎるだろ」

「えと、お題を出していただければ……」

「やんの!?!」

わかってるねこの子。大人しそうに見えて実は……ってタイプか。

「じゃあ、『人生』で」

「おもっ！ お題が予想外に重すぎるよ！」

「整いましたー」

「謎かけ!?!」

「人生とかけて、北海道と解きます」

「その心は？」

「どちらも長く平坦な道が続くでしょう」

んー……。

微妙だ。

「うん。まあありがと」

「いえいえ」

「一体なんだっただんだ今のは」

それじゃ、次いきますか。

次は誰にしようかな……あ、あの後ろの方で寝てる子に話しかけてみよう。

「ねえねえ」

「ぐう」

……寝ている。ものすごい気持ち良さそうに寝ている。

「ねえってばー」

「すぴー」

「やめときなよ日和。こんな気持ちよさそうに寝てんのに」

「こんなに気持ち良さそうに寝てるのが気に食わないの!」

「どんだけ自分勝手なんだよ」

「うーん……」

あ、起きたかな？

いや、まだ目を閉じてるな。寝てるみたいだ。ただの寝言かあ。

「んー……眠たい」

「ん!？」

「今なんて言った!？」

「あー……寝れない。眠たい」

「いや寝てるだろー!」

「いつちゃん、寝てるからツツコミしても意味ないよ!」

「いや、でも寝てるだろうが!」

「そりゃそうだけど!」

「んー? あんたら誰やあ?」

あ、今度こそホントに起きた!

「あー、起こしちゃってごめんね?」

「あたし、日下部日和。んでこっちが桜馬乙香。あたしらのこと知ってる?」

「ふえ? あ、今朝はごはんの気分かなあ」

「何の話だ!?!」

「まだ寝ぼけてる?」

「あれ? お母さんやない……ってここは学校や。なんで学校にいるんや?」

あたしが言うのもなんだけど、この子大丈夫か?

「あ、ちゃうちゃう。学校に来たんや。そうそう。んであんたら誰や？」

「すごいマイペースだな……」

「あたしは日下部日和、そんでこっちは」

「あーーーーー！」

「な、なに？」

寝ぼけたり急に叫んだり……この子ヤバい子なのか？ クスリとかやつちやつてるのか？

「お薬飲むの忘れてた」

「やっぱりクスリやってんの!？」

「せやねん。胃の薬やねん。これ飲まんかったらぼんぼん痛くなるねん」

「ぼんぼん!？」

「いやお腹のことだろ」

わかってる、わかってるけど……中学生が言う言葉か？

「水で飲まなあかんねん。お茶はあかんらしい」

「はあ」

「いっちゃんは『そんなこと私に言われても』って顔で女の子を見
てる。そういえば名前聞いてなかったな。」

「あなた、名前なんて言うの?」

「きはらぎ……『ほっげぶっ』」

「『めんめん。飲んでからでいいよ』」

「うん……みず、みず……『ほっげ入っ』」

「はい、水」

「はひはほぶ……ぐう」

「むせたせいでもものすごい薬が口から出ただけど、これはいいの
か?」

「……ごくん。えっとやな、うちの名前は……あー……!」

「今度は何!??」

「うち……やなくて、私、関西弁喋らんように……じゃなくて喋ら
ないようにするつもりだったのに」

「……はあ」

「もはやいっちゃんは露骨にどつでも良オネツにしている。目が死

んでるし。

「これからは関西弁喋らないから、今までの私は忘れて！」

「あ、うん」

いや無理だけども。

「よし。じゃあもっかい。私の名前は木更津弥生です。よろしくお願いたします」

英語の文章か。

「あ、どうも。私は日下部日和です、よろしく」

「私は桜馬乙香です、よろしく」

「よろしく」

こんな女子中学生いねーよ。

「まあなんと云つかその……」

「ん？」

「あれ？」

ま、まさか……

「……おやすみなねべっ」

「また寝たー！ー!?」

なんと言いますか、世の中にはいろんな人がいるもんだと思いました。

「あんたは言えないけどな」

「てへっ」

「うるせーよ」

第9話 あだ名はまーち

ども。さつきです。只今1 Eで授業中です。わがクラスながらやっぱり変なやつ多いね。うにゃが言ってたとおりだわ。

「じゃあここまででわかんない人」

「はい！」

出た。変なやつ筆頭だ。

「……日和。どこがわからん？」

「さつきちゃんの性格の直しかた！」

「しばきまわすぞてめえ」

「うそ！ 今のは冗談。ほんとはさつきちゃんの」

「はい却下ー……って、ん？」

ぎゃーぎゃーとわめいている日和と、その日和を見ている生徒達の中でただ一人下を向いている奴が。ってかあれは……

完全に寝てるだろ。

あたしは日和に構わず生徒達の間をかき分けてその爆睡野郎の正面へ。

「……おい」

とりあえず呼びかけてみる。

「……むじゅ」

「起きろ？」

「……もうお腹いっぱい」

「……ベタだなお前。ホントは起きてんじゃねーのか？」

そういいながらほっぺたをつついてみる。

「うーん……ホンマに寝てますよお」

「どんな寝言だ。起きてるだろ？ あたしをおちよくってんだろ？」

「ちがつ……あ、それちがつそこは赤……あれ？ あ、緑であって
たわごめん」

「何の話してんだこいつ!？」

「さつきちゃん、その子、木更津弥生っていうらしいよ」

いつの間にか全員がこっちを見ており、日和も静かになっている。
そして後ろを向いた日和が名前を言ってきたわけなんだが。

「へえー、そうなんだ」

初めて知った。

「いや、へえーって。覚えとかなきゃダメでしょ」

「気にすんな。それよりこいつをどうするかって話だよ」

「あ、そんな話だったんだ」

「今変わった」

「急だな」

人生ってそんなもんだよ。まだ18年しか生きてないけど。

「あ、そだ！ さつきちゃん、木更津ちゃんが寝てる間にあだ名を
考えてあげよ！」

「あだ名だあ？ お前はよくよく下らんことを言っよなあ。よし、
やるっ」

「やんのかよ！」

「はい乙香ナイスツッコミー」

「あ、ど、どうも」

何照れてんだよバーロー。

「じゃ、とりあえず最初はみんなから意見を聞こっ」

ざっと見渡すと、急な展開の割にみんな手を挙げてる。うん、さすがE組だわ。

「はい！」

「じゃ、まずは日和」

「キサラン・パサラン」

「却下」

「なんで!?!」

いやなんでって言われても……ってかそんな意外そうな顔されても。

「だって言いにくいし、パチもんっぽいし」

「パチもんって何さ!?! そんな呪文知らないもん」

「知ってんじゃねーか。はい、もう次いくぞ次」

「はい！」

「じゃ、その名もなき少年A」

「いや名前ありますよ!?!」

「あたしが覚えてなかったらないに等しいんだよ」

「横暴だ！」

なんだよこいつらうるさいなー。

「お前ら、正解してても難癖つけて英語の点数0にすんぞ？」

「い、陰湿なやりかただ」

「うっせ。教師なんざこんなもんだよ。ほらお前早く言えよ」

忘れかけてたけど木更津のニックネーム付けだぞ。

「あ、はい。ズバリ、眠り姫で！」

「失格……いややっぱ処刑」

「処刑！？ 何で言い直したの！？」

「いや、想像を絶する気持ち悪さ、それがAだったから」

「それどういうこと！？」

「どつもこつもねえよ。お前さ、もうちよつと空気読めよ。ここはボケるところだろ？ 何ちよつと素敵なあだ名付けようとしちゃってんの？ しかも眠り姫ってお前……お前はもうダメだ」

「なんでそうなるんですか！？」

あー、うるさい。もうこいつ飽きたしいいや。

「じゃ、次誰が言う?」

「え、僕は無視ですか!？」

「もういいよ、しつこいよお前。お前の時代は終わったんだよ」

「え……」

「はい! はい!」

お、Aを完璧に無視して元気よく手を挙げるやつが。さすがE組。

「よし、じゃあ……ってまた日和かよ」

「またとか言わない! 今度はバツチリ考えたから」

「ああ、はいはい。どうぞ」

「ズバリ、弥生ちゃんだけに……三月で!」

……三月?

「お前な、三月ってそれ安直と言っか、雑じゃないか?」

「いーじゃん! 他に案もないんだしさ!」

「いや、眠り姫は」

「お前は黙ってるよ」

「……はい」

まったく、こいつは油断も隙もねーな。
それにしても三月ってのはあんまりだろ。それならせめて……あ、
そうだ。

「あたし英語教師だし、三月を英語にしてマーチってどうよ？」

「『コアラの』って付けなくていいの？」

「逆に付けなくちゃならん意味がわからんわ」

「いやその逆に」

「だからその逆はねえんだよ」

このやり取り、前にもやった気が……デジャヴ？

「まあいいや。じゃあ、マーチに決定で」

「えー、せめて平仮名で『まーち』にしよつよ」

「そこは気持ちの問題だろ」

「いや、表記として」

「……表記？」

こいつよくわからんことを言うな。まあ日和だし仕方ない。放っ
ておこづ。もう取り返しつかないし。

「そんじゃま、新しくあだ名も決まったところで、このあだ名を叫んであいつを起こすぞみんなー！」

「いえーい！」

日和のテンションが異常であることは言つまでもない。

「いくぞ？　せーのっ」

「」「まーち！……」「」

練習も何もしていないのに息ぴったりじゃないか。さすがE組。類が友を呼んだわけだ。

ところで、あいつは起きたのか？
ちょっと近づいて見てみる。

「んー……むう……」「……」「アラの」

「聞こえてるだろ！　お前起きてるだろコリア！」

「さ、さつきちゃん、抑えて抑えて」

「いや、でもいつ……」

「んー……ね、眠い」

「寝てるだろっがア！」

「それやった！　この前そのくだりやったから！」

「んなこと知るかア！」

そうして今日も、E組の授業は一向に進む気配を見せないの
であった。

第10話 ある日のまーち

「弥生！ 早く起きなさい！」

「んー……あと1時間」

「何言ってるの！ あと1時間寝たらもう朝礼始まってるわよ！」

「朝礼……？ あ、あれはおいしいやんなあ」

「またこの子は寝ぼけて……」

「あー！ー！」

今ぱつちり目が覚めた弥生です。時刻は7時40分、たしかに起きないとあかん時間です。ってかそれよりも！

「お母さん！ また関西弁つかつてもた！」

「そんなこと知らないわよ。それよりも早く朝食済まさない」

「え、あかんねんってえ！ 標準語に戻さな！」

「戻すって言うてもあんだ、生まれつき関西弁なんだし、戻すも何もないでしょ」

「それはそうやねんけど……ってまた使つてもうた！」

そう、うちは小学生の中学年までは関西に住んでたもんやから、

関西弁を喋ってしまうんです。何でお母さんは標準語を話せるんやろつ。

その疑問を朝食の時にぶつけてみました。

「なんでお母さんは標準語喋れるん?」

「いや、なんでって言われても、もう3年もこっちに住んでたら勝手に喋っちゃっわよ」

「じゃあうちは何で喋られへんの?」

「さあー? そんなことより、もう時間ないわよ。早く支度なさい」

「はあい」

いつもこうやって答えをうやむやにされて終わってしまいます。

お母さんにもわからへんのやろか?

そんなことを考えてるうちにもう時計は8時を回ってます。これもいつも通りです。

「あ、もう行かなあかん」

「弥生、財布持った?」

「大丈夫、使わへんから」

「時計は?」

「いらんいらん」

「教科書は？」

「いらんいらん」

そんなやり取りをしてから、家を出ます。何かカバンが軽い気がするけど……いつものことやし、まあええか。

うちは歩いて学校に行きます。自転車で行ってもええのですが、自転車に乗られへんのです。正確には、乗れるけどブレーキをかけられへんのです。

8時28分、だいたいこのぐらいに学校に着きます。先生はまだ来てません。

「ふうー、間に合ったわ」

「まーち、おはよー」

「あ、日和ちゃん。おはよう」

うちは何故か学校ではまーちと呼ばれてます。授業後に目が覚めたらこんなことになってました。

「そっぴやあんだ、今日の放課後空いてる？」

「放課後？ 空いてるよー？」

「そんじゃちよつと寄り道して帰るぞ！ うまいたこ焼き屋があるらしいんだよ」

「たこ焼き！ それは食べなあかん！」

「だろ？ そんじゃ放課後待ってるよ」

「わかった」

よし、今日はたこ焼きを食べるんや。たこ焼き……たこ焼き……
たこ………ぐう。

「まーち、オイ起きろ」

「ふえ？ お母さん……えらい若くなっ たなあ」

「誰がお母さんだ」

いつの間にか寝てたみたいや。目をこすってよく前を見ると、
女の人が立ってる。誰やろう？

あ、さつき先生や。

「あ、さつき先生、おはようございます」

「うんおはよう。そしてじばくぞ」

「え、あ、ちやうちやう。おはようやなくて……お、おやすみ？」

あ、さつき先生の教科書が丸まって振り上げられて

「あ たつー！」

「寝てんじゃねーよ」

「ちやうんやってえ」

時計を見ると11時過ぎを指してる。もう3時間目かぁ……誰か起こしてくれたらええのに。

そして4時間目からまた寝てしまい、次に起きたのは午後3時やった。お昼食べ損ねてもうたなあ。

「じゃあ今日の授業はここまで。さよならー」

「さようならー！」

終礼もいつの間にか終わって、放課後に。放課後は何か予定があったような……あ、そや。たこ焼きを食べるんや！

「おーい、まーち」

「あんたまた寝てたわね？」

「日和ちゃん、乙香ちゃん。おはよう」

「おはようじゃないわよ」

「ま、いいじゃん。早く行こうぜー」

3人で並んで駅前の商店街へ。歩いてほしい10分ちよつとのところにあるらしいです。

「そついえばさー」

と、日和ちゃんが言ったのでうちとこ番ちゃんの視線は日和ちゃんへ。

「たこ焼きつてさ、たこの丸焼きだと思ってたんだよあたしは」

「あんだねえ……」

「いやいや。みんな昔はそうだったと思うよ」

「関東の人はみんなそうなん？」

「いやそんなはず」

「そうなんだよ。関東ではそれが当たり前なんだよ」

「へえー」

「オイ」

そんな話をしながらしばらく歩くと、新しくできたたこ焼き屋がたしかにありました。

「たこ焼きうつください」

「あ、たこ焼き言ってもたこの丸焼きとちやいますよ？」

「んなこと言わんでいい」

ツッコミされながらまたこ焼きをもらい、みんなで座って食べることにしました。

「うわぁ、うまそー!」

「たしかにおいしそうねー」

「おいがすごいぞ」

「いただきまーす」

お昼も食べてないし、ものすごいお腹空いてるんや。やけど、やけど……

「食べられへん」

「仕方ない、あたしが食べてやるよ」

「待て待て! 急すぎるだろ」

「これ熱すぎて食べられへんのや。うち猫舌やんかあ?」

「いや……知らんけど」

猫舌ってホンマ困るわ。猫も大変やなあ。

「あ、そういえば、猫ってみんな猫舌なんか?」

「……ちあ?」

「猫舌じゃないやつもいるんじゃない？」

「そうなんかなあ？ いや、でも猫舌って言うぐらいなんやし、みんな猫舌なんちゃうやろか。でも例外うちゅうのもあるやろうしなあ。そういえば犬かきつて全部の犬ができるんやろか？ それが全部やなかったら猫舌も全部やない気がするけど……あ、犬かきと言えば猫は泳げるんやろか？ 猫は猫かきを」

「……早く食べないと冷めるよ？ あと、日和がすごい見てるから早く食べないと奪われるよ？」

「へ？ あ、うん」

また考え事してしもた。考え事をし始めると周りが見えなくなるってお母さんに何回も言われたのに。
まあええわ。今はたこ焼き食べよ。

「いただきまーす。あーん……あつっ！」

「……あんたアホだろ」

なんとか全部食べて、ちょっとしてから帰ると、家につく頃にはもう6時前でした。

「ただいま」

「おかえり。弥生、遅かったわね。お父さんが心配してたわよ」

「あ、お父さんもう帰ってるんや」

「弥生ー！」

この地響きができるような叫び声の主はお父さんしかない。見ていると、居間から大きな影が飛び出てきた。

「お前……こんな時間までどこひよっつき……ほっつき……あ、歩いてたんやあ？」

「くさっ！ お父さんものすごい酒臭い！」

「お前、父親に向かって……あの……アレすんなおお」

今日のお父さんはいつも以上に荒れてるなあ。

「お母さん、お父さんに何かあったん？」

「年下の子にフラれたんだってさ」

「また？ もう、お母さんがいるんやから他の人に手え出したらあかんよ？ ってかそれをお母さんに言うのもあかんやろ？」

「いいのよ、弥生。どうせこの人は手なんか出せないんだから。この顔だし」

「ぐうー」

こんな感じで今日も我が家は賑やかです。

第11話 ある日の季実

「おはよう」

「おはよー!」

おはようございます、季実です。今日も今日とて学校へ来てます。そりゃまあ小学生なんで。

元気よく挨拶を返してくれたのは私の友達の成瀬真水、通称まみちゃんです。ちょっと『コワイ』ところもあるけど、基本的にはいい子です。

「きいちゃん、今日はね、転校生が来るらしいんよ!」

「へえー。どんな子だろ?」

「それがね、女の子なんだってさあ! もう嬉しいなあホント! あ、でも本命はきいちゃんだから安心してね?」

「え、あ……う、うん」

これがまみちゃんのコワイところ。ノリなのか本気なのかかわからないところがまたコワイわけで。

「もー、そんな顔してたらチューしちゃうよ?」

このノリで幾度となく唇を奪われたことがあるのです。あれ? これってヤバくないか? ……いや、大丈夫大丈夫。こんなの普通だよ、うん。

そう自分に言い聞かせながら、気持ちを落ち着かせる。まみちゃん
の口がチューの準備をしているのはスルーしよう。

「はあい、みんな席についてー」

まみちゃんの顔がだんだん迫ってきたところで先生が教室に入っ
てきました。まみちゃんは残念そうに『ちえー』と言いながら席に
戻っていきます。本気でする気だったなあの子。

「それでは皆さん、おはようございまーす」

「おはようございまーす!」

「はい、社交辞令ありがとう」

何言っただよあの人。

今年になって新しい先生になったんですが、いまいちキャラが掴
めません。ちなみにあの先生は名波無花果、ななみいちじくって言
うらしいです。変わった名前ですよ。ちなみに年は22だそうで
す。

「今日はー、なんか知らんけど転校生来たんで紹介しまーす。はい、
どござー」

気づかなかったけど、先生の後ろに小さい女の子が隠れてたみた
いですね。その子は先生の声に押されるようにして前に出てきまし
た。てかホントに小さいな。110もないんじゃないか？

「……………」

「どうしたの？ 男子の視線が気にいらない？」

だからあの人は何言ってるんだよ。
でもたしかに転校生の女の子は喋ろうとしない。緊張してるのか
な？ そんな風には見えないけど……

「ちょっとー？」

と、先生が更に促すと

「ん？ わらわに言っておるのか？」

と、ものすごい古風に転校生は喋りだした。
意外すぎるしゃべり方にみんなぽかーんとしている中、先生だけ
はすごく嬉しそうに答える。

「そうそう、おぬしに言っておるのじゃー」

「そうか。何をすれば良いのじゃ？」

なんだこの会話。

先生はさすがにノリでやってるんだらうけど、転校生は本気であ
の言葉遣いをしてるみたいだ。ホント、世間には色んな人がいるも
んだなあ。

「自己紹介ナリー」

それはまた何か違う気がするけど。

「なるほどな。わかった」

そう言って転校生は先生の方からこちらへ向き直った。そして咳払いを一つ。

「わらわの名は卑弥呼！ 齢十六にして女王となりし者なり！」

『なり』って言った！ いっちゃったよ！ ってか名前……ひみこって言ったよね。珍しい名前だなあ。しかも女王がどうとか言ってたし。ちよつと変わった子なのかな？

「はい、よくわからない自己紹介ありがとうー」

先生がみんなの気持ちを代弁するように言う。いや先生がそんなこと言っちゃダメだろ。

「うむ、よろしく頼む」

ひみこちゃんはそんなことはお構い無しと言った風に言う。また何かすごい子が来ちゃったなあ。

「はい、それじゃ朝の会はこれくらいにして、かつたるい授業を始めようっ」

いやかつたるいってオイ。

そんなこんなで授業が始まり、まあ授業はいつもと同じなんて中略、全部の授業が終わったのは3時でした。

「はい、それじゃー今日もやっと終わり。お疲れさまでしたー」

「お疲れさまでしたー！」

会社か。そこは『さようなら』だろ。

とか思いつつもつっこまず、帰りの会も終わった訳だし帰ることに。帰りはいつもまみちゃんとかえってるんですが……あれ？ まみちゃんどこに……あ、いた。ひみこちゃんのとこにいる。

だいたい転校生が来たときってのは周りに多少の人だから出来るものだけど、ひみこちゃんのまわりにいるのはまみちゃん一人だ。やっぱみんなちょっと距離感あるのかな？

そんなことを考えながら近づいていくと、まみちゃんがこちらに気づいた。

「お、きいちゃん。今ね、ひいちゃんと喋ってたんよ」

「あら？ いきなり仲良さげだねー。ひいちゃんとか呼んじゃって」

「いやいや。今ちようどケンカしてるところさあ」

「いきなりかよ」

まったくこいつは何をやってんだか。ちらっとひみこちゃんの方を見ると、頬を膨らまして確かに不満そうだ。ってかすごい可愛いなオイ。

「ひみこちゃん？」

「……なんじゃ」

あ、こりゃ確かに怒ってるな。

「まみちゃん、なんでひみこちゃんとケンカしてんの？」

「いや、あたしがなんの前触れもなく唐突にデコピンしたら急に怒ってさあ」

「そりゃ怒るわ！ ちょっと、私とかにやるんならまだ冗談通じるけどさあ、今日会ったばかりの子にはそーゆーことしちゃダメでしょーっ、」

「いや、でもそこにデコがあつたから」

「どこにもあるわー！」

「あ、ここにもデコがー！」

「ちょ、やめ……いたっ！ あんたのデコピン、絶妙に痛いのよ！」

「ふふふ」

そんな風に私とまみちゃんがいつものようにくだらないやり取りをしていると、いつのまにかひみこちゃんが笑ってました。

こつやって笑ってる顔を見ると、やっぱりひみこちゃんも普通の女の子なんだなあって思う。ちょっと変わってても、私たちとおなじように怒ったり笑ったりするんだよね。

とか私が思っていると、

「おぬしら、面白いのう。どれ、わらわと盃を交わさんか」

笑顔のままそう言ってランドセルから大きなお皿とお酒を取り出すひみこちゃん。『わーい』と両手を上げて喜んでもらおうとする

まみちゃん。

んー……

せっぱほ。遊わってるわ。

第12話 さつきと卑弥呼

「あ、おはよ。お姉ちゃん」

「おう、おはよ。きい、今日誰が来るのか？」

「あ、そーなの。言ってなかったっけ？」

「どーもおはようみんな。さつきだよ、うん。」

日曜日の今日はいつも通り11時まで目が覚めないはずだったんだけど、リビングで鳴り響く掃除機の騒音によって目が覚めちまった。どうやらきいの友達が来るらしく、そのために掃除してるみたいだな。

「へえ、友達いたんだ」

「いるわ！ お姉ちゃんじゃないんだからさ」

「お前……お前さあ」

こいつ時々すげーひどいよな。あたし姉貴なのにさ……そりゃ掃除、洗濯、料理とか家事は全部やってもらってるし家計もきいがちやんとやってくれてるし朝も起こしてくれるし……あれ？ どっちが姉だっけ？

「お姉ちゃん？ 大丈夫？ 冗談だよ、さつきの」

「え、ああ、うん」

ぼーっとしてたな。ガラにもなく頭使ったから。

「で、誰が来るって?」

「まあまみちゃんはいつも通り来るんだけど」

「まみか……いや、いいけどさ」

あいつちょっとヤバいんだよな。何がって……まああたしには関係ないからいいけど。

「今日はもう一人来るの。しかも転校生。ちっちゃくって可愛いんだよー?」

「ホントかよ? お前とかまみみたいなんじゃねーの?」

最近のガキは妙に大人びてて腹立つからなー。

「ぴんぽーん!」

そんな会話をしていると、インターホン……ではなく、インターホンの声真似をしながらまみが入ってきた。

「いやインターホン鳴らさんかい」

「まあまあ。細かいことは言いつこなしだよ。愛しのきいちゃん」

「なんで『愛しの』ってつけたんだ」

「愛しいから」

「やかましいわ」

こいつらサラッとこんなやり取り取りしてるが、あたしからしてみればまみの目が怖いんだよ。本気っぽくて。

「で、やや愛しのひいちゃんは？」

「ややって何だ。ひみこちゃんはまだ来てないけど」

「えー？ あたしがひいちゃんちに電話したらもう出たって言ってたけどなあ」

「ひみこちゃんちってどこだっけ？」

「アレだよ。ほら、三丁目の怪しい研究所みたいなとこ」

「え、アレなの！？ ふうん……どうやって知ったの？」

「追跡」

「まみ、それはな……ストーカーって言っただ」

「言い方によるよね。悪く言えばストーカー、良く言えば……警備員？」

「意味わかんねーよ」

そんな感じでたいして中身のない会話をしてたが、ひみこつてのが来る気配はない。心配なのか、きいはキョロキョロし始めた。

「まだかな、ひみこちゃん。10時に来るって約束したのに……」
時計を見ると10時20分を指している。たしかに遅いな。

「しゃーねー。あたしが見てきてやるよ」

「ホントに？」

「気が利くねお姉ちゃん。2人つきりにしてくれるなんて」

「……お前、お前なあ」

こいつホントに大丈夫か？

「まあいいや。行ってくる。きい、貞操は守れよ」

「は？ 何言ってる」

「いつてらっしゃーい！」

まみの表情が爛々としてたが……まあいいや。まだ小2だし、そんな大変なことにはならんだろ。

一抹の不安を抱えながらもあたしは外に出た。

「あ、てかお姉ちゃん、ひみこちゃん見たことないからわかんないじゃん！」

「まあいいじゃんそんなこと。2人きりの時間を楽しもうよー」

「ちよ、まみちゃんやめい！」

「ぐはっ」

さて、外に出たはいいが、ゆくゆく考えてみればあたしはその『ひみこ』ってのの顔を知らんわけだ。そんなんじゃどうにも探しようがないな。どうする、一回家に戻るか？ いやでも……

そうやって一人で唸っていると、何やら向こうで大きい声が聞こえた。何かもめ事かな。

ちよっと見てみると、小学生低学年らしき小さい女の子と中学生ぐらいの男子二人組が口論をしているみたいだ。穏やかな雰囲気ではない。

「な、なんだてめえ」

中学生の片割れが慌てるのを隠しながら言う。あー、こりゃもしかしたら……

「だから、今さっきぬしらが勘定を済まさずに懐に入れた飴菓子を
出さんかといっつとるんじゃ」

えらい古風な喋り方な小学生だな。

それはさておき、やっぱりあたしが予想した通り、あの中学生どもの万引きみたいだな。まったく、今時の子供は……

ま、あたしは人のこと全然言えないけどね。

「おい、何わけわかんねーこと言ってるんだよ」

「あんま調子乗ってると痛い目見るぞ？」

「なんじゃと？ 貴様ら罪を認めん気か？」

おっと、何か話がありがちな方向に向かってるじゃんか。それにしてもあの子すごいな。中学生相手に全く物怖じしてない。でも体は小学生、力にモノを言わされたら……

「ちよつとこつちこいや」

「む！？ なにをするのじゃ！」

「大人をなめたらどーなるか教えてやんだよ」

「おい、貴様ら離せ！」

あーあー。やっぱりこうなったか。それにしても小学生にまで手上げるとは、感心しないな。

ま、とにかく助けるか。なるべく話し合いで解決する努力はする。

「おい、君たちー」

「あん？ なんだよおばはん」

「あ？」

……今こいつなんつった？ お、お、お、おば……？

「……オイ、今なんつったよ？」

「聞こえなかったのか？ おぼはん」

よし、努力終了だ！

もう、あれだよ……消そう、うん。

怒りを通り越して落ち着いたあたしは、とりあえず暴言を吐いた方の中学生……Aとするか。Aにっこり微笑む。

「ちょっとまっすぐこっち向け」

「え？ 何を」

中学生Aがこっちを向いた瞬間、あたしは右足を思いっきり上げて股間を一撃。

「ぐおっ！！！！」

ものすごいなり声を上げてA、撃沈。

もう一人の中学生……そうだな、ポメラニアンとしようか。え？

Bじゃないのかって？ そんなのどうでもいいんだよ。

「よし、ポメラニアン」

「ぼ、ポメ……？」

横でうづくまるAを見て震えながら答えるポメラニアン。こいつにさっきのはちょっと可哀想だな。

よし、ちょっと軽めでいこう。

「ちょっと左向いてみ？」

「ひ、左？」

あたしの言う通り左を向いてくれたポメラニアンの右モモにちょっと緩めの一撃。

「おうふっ!!」

面白い叫び声を上げながらポメラニアン、撃沈。

「ふー……疲れた」

久々に体動かしたらしんどいなー。あ、そういや小学生は……もしかして恐がって帰っちゃったかな？
とか思っているところから声が。

「ぬし、強いのが」

あ、いたよ。

「え？ ま、まあね。てか大丈夫？ 怪我不い？」

「いや、毛はあるぞ？」

「……そういうことじゃなくてだな」

なんだこの子は。まさかの天然キャラか？

「まあよい。助太刀感謝するぞ。お、ところでぬし、このあたりで

篠塚という者の家を知らぬか？」

「篠塚？ それあたしんちだけど……あ、もしかしてあなた、『ひみこ』って名前？」

「いかにも！」

「うわ、すごい偶然。あたし、季実のお姉ちゃんやってる、さつきっていうの。あんたを探しに来たんだよ」

「おお！ それは助かる！」

奇跡的にもひみこちゃんを見つけたあたしはひみこちゃんを連れて帰ることに。いやー、やっぱりあたしには運命の女神がついてんね、うん。

そういやさっきの中学生の着けてたネックレス、見覚えがあるよ
うな……

ま、いつか。

家に帰ると、衣服のちよつと乱れたきいときいに襲いかかって返り討ちにあい、鳩尾を押さえているまみがいましたとき。

……何やってんだこいつら。

第13話 嵐の前の日和

「そんじゃま、今日はここまで」

「やったー!」

どうも、こんにちは。乙香です。

もう6月にさしかかった今日この頃、いつも通り日和はづるさいです。

「おっし! 帰ろー!」

「あ、そついや今日からちようどテスト一週間前だな。まあほどほどに頑張れよー。そんじゃ」

「……え?」

が、先生のこの一言で日和は完璧に固まってしまいました。なんとか首を動かしてこっちを向く日和。……なんか顔が青ざめてるし。

「い、いつちゃん」

「何?」

「……テストって何?」

「テストはテストよ。中間テスト。もう中学なんだし、そんぐらいあるわよ」

「なんだそれは！」

頭を抱えながら唸る日和。まったく何やってんだか。

「あんた全く勉強してなかったわけ？」

「当たり前じゃん」

「何でそんな偉そうなんだ」

「それはあたしがあたしだから」

「意味わからんわ」

何故かちよつと照れてる日和。なんなんだこいつは。

「ま、幸いテストまではあと一週間あるんだし、今日から勉強すれば平均は取れるでしょ」

「平均なんざいらん！ 目指すはトップ！ それが無理ならドベでいい」

「極端すぎるだろ」

こいつバカだとは思ってたがまさかここまでとは。ってか日和がトップを取ったらこの学校終わりでしょ。

そんなことを考えてため息をつく私をよそに、何故か日和はやる気になってるみたいです。

「おー、俄然燃えてきた！ 今日から勉強会開始だよ、いつちゃん
！」

「あーそう。頑張ってるねー」

「もちろんいつちゃんもだよ！」

「……またかよ。まあいいや、付き合っただけよ」

「当然だ！」

「調子乗んな」

「あい」

というわけで、日和と一緒にやることになってしまった勉強会。
面子は私、日和、まーち、とまあ予想通りんだけど、問題はその
場所。

「やっぱり、テスト一週間前だし」

「せやせや、勉強せなあかん」

「でも図書館とかは開いてないし」

「せやせや、開いてない」

「だから、ここしかないじゃん？」

「せやせや、ここしかない」

「やかましいわ」

呆れた顔でそう言うのはさつき姉ちゃん。そりゃそうなるよね。

「お前らな、教師の家で勉強するって聞いたことあるか？」

「ない。だからあたしたちが世界で初めてだよ！」

「そういうことを言いたいんじゃないんだよあたしは。つーか世界で初めてではないだろ」

そう言うってから深いため息をつくさつき姉ちゃん。苦勞は察するよ。

「だからさ、教師ってのは」

「おじやましまーす」

「ちよ、待てオイ！」

「あ、いらっしやーい」

勝手に入る日和を必死で止めるさつき姉ちゃんと、満面の笑顔で私たちを歓迎する季実ちゃん。なんかシユールだな。ま、どうでもいいから私も入っちゃおう。

日和と格闘するさつき姉ちゃんを横目に、まーちと二人で季実ちゃんのものとへ。

「乙香ちゃん、久しぶり！ えっと、こちらの方は？」

「あ、こいつは」

「うちは……えっとやな、あの……マーチ木更津です」

どっかのマンションの名前みたいだな。

「え、えっと、マーチさんでいいんですか？」

「うん、いいよ」

「ちよ、ちよっと待ってえな！ ツツコミがツツコミ放棄したらあかんやろー」

知らねーよ。

「ハイハイ。季実ちゃん、こいつの名前は木更津まち子。通称まちだよ」

「まち子って誰!?!」

「へえ。まち子さんよろしくお願いしまーす」

「ちやうちやう！ ちやうねん！」

と、珍しくまーちが全力で否定してたんですが、そんなことはお構いなしに玄関から一つの足音がやってきてまーちの話を遮りました。

「はあ、疲れた……っておい、きい、なんでこいつら入れてんだよ

「！」

「へ？ だってお客さんでしょー？」

「ちげーよ！ こいつら勝手に来たんだって」

「いーじゃん。折角来たんだし、入れてあげなよー」

「そうそう！ きいちゃんは良いこと言うね！」

「うお、日和！ てめえどっから入った！？」

「窓」

「空き巣かお前は」

「ってかさ、よく考えたらおかしいじゃん！ なんでさつきちゃん
はあたしたちより先に帰ってるわけ？」

「いや、職員会議とかめんどくさかったからサボってバイクで帰っ
てきたからだけど」

「それダメじゃん！」

「お姉ちゃん、ホントにクビにされるよ？」

これには季実ちゃんも呆れてるみたい。さつき姉ちゃんの顔から
は反省の色は全くうかがえないけど。

「とじろでな」

背後から突然声がしたと思えばまーちでした。急に来られると怖いよ。

「うわ、いきなり何よまーち」

「反省の色って何色なんやろ？」

「は？」

「いや、うちとしては青やと思うねん。でも緑かもしれんし、赤とかかもしれん。あ、白でもいけそうやな」

「……ああ、そう」

こっちでまーちがすごいどうでもいい話をしている間に、向こうでは話がまとまったみたい。

「……はあ。もういいや。勝手にしとけー。あたしや相手はせんぞ」

「ほんとに？ やったー！」

ついにさつき姉ちゃんが折れて、そう言って諦めたさつき姉ちゃんには自分の部屋に戻ってしまいました。なので3人と季実ちゃんて勉強会開始。とりあえず私は英語からやろつ。

「あたしは数学やる！ 一回も起きてなかったから全くわかんないんだよー」

「うちは……うちは……えっと何しよかな。あ、あれしよ。なんや

っけあの……あれ………ぐう」

……ダメだこいつら。

それから30分経って。

「ぐう」

「ちょっとこれわかんないや。ってか全部わかんない。一切わかんない。やってらんない」

案の定まーちは寝ていて、日和は勉強してるっちゃあしてるんですが、かなり陰鬱とした雰囲気ですね。

「……日和、わかんないところあったら聞きなよ？ 私、数学は割と得意だし」

「いや、なんか負けた気がするから友達には聞きたくない」

「別にそんなこと気にせんでも」

こいつ、妙なところで意地張るのよね。

「かといって季実ちゃんに聞けるわけもなし……あ、そだ！ こころには先生がいるじゃんか！ すっかり忘れてたよー」

そう言つとすぐに立ち上がってさつき姉ちゃんの部屋に向かう日和。まあ結果は大体予想がつくけどね。

見ていると日和は一分足らずで帰ってきた。何故か笑顔で。

「何で笑ってんの？」

「いや、それがさ、さつきちゃんによるとね、数学なんか勉強しなくても大丈夫なんだって！ 先生が言うことなんだし正しいよね？ というわけであたしは漫画を読みます」

「オイ」

結局勉強会にならなかった勉強会。一週間後はテストだったのに、こいつら大丈夫なのか？

「あっはっはっはっ」

「ぐうーすぴー」

……ダメだな。

第14話 行動的少女真水、前

どうも、みなさんこんにちは。きいちゃんの許嫁と噂される真水です。

日曜日の午前7時現在、私はきいちゃんのベッドの中にいるのです。二人で一夜を明かした わけではないんですね、残念ながら。まあ簡単に言うと侵入したんですね。そんなわけで横を見るときいちゃんの寝顔があるんですよね。

「きいちゃん……寝顔も可愛いね」

もちろんツツコミはこない。寝てるから。

「きいちゃん……今、スキだらけだぞよ?」

ちょっとボケてみたけどやっぱりツツコミはない。

うーん、このまま起こしてしまうのはもったいない気がする。何かしなきゃ、何か……

あ、そうだ。

「あ、きいちゃん起きたの?」

「うん、今起きたよ愛しのみみちゃん」

「チューしていい?」

「チューしたければ……してしまえばいいじゃない」

「ホントに？　じゃ、遠慮なく」

「待てオイ」

「なんで？　今チユーしていいって言ったのに」

「やかましいわ！　私が寝てる間にまみちゃんが勝手に一人で言うてたんでしょー？　ってか何でここにいるんだよ」

「そんな理由なんて……いいじゃない」

「何なのそれさつきから」

「一応新ネタなんだけど」

「んなもんいらんわ」

「いやー、やっぱりシツクミがあるといいね。しっくりにくるよ。

「ふあゝ眠い。まだ7時過ぎじゃんか」

「眠ければ……寝てしまえばいいじゃない」

「身の危険を感じるんだよ」

「……いいじゃない」

「良くない！」

そう言いながらちよつと顔が赤らんでるような気がしないでもな

い……いや、あれ赤らんでるか？……赤らんでる、うん。赤らんでることにしよう。

そんな赤らんでるきいちゃんを見つめていると、突然きいちゃんの部屋のドアが開いた。

「なんだよお前らー、朝っぱらからイチヤついてんじゃねーぞー。うるせーし」

入ってきたのはものすごい眠そうな顔をしたさつきお姉ちゃんでした。

「イチヤついとらんわー！」

「きいちゃん……恥ずかしがらなくても、いいじゃな」

「ひるんごっつものー！」

「うるさいのはおめーだー」

そう言つとさつきお姉ちゃんは横に飾ってあったデイベアを手につかみ、振りかぶって

「ちよ、お姉ちゃん何して」

「しゅら〜」

その緩い声とは裏腹に全力で投げてきたぶっ！

「何であたしに当てるのさお姉ちゃんー！」

「コントロールに乱れがあ〜」

「完璧にこっち狙ってたじゃん！」

「そーだよ悪いかよ」

「な!?!」

開き直りおった……ここにきて。

「きいちゃんー、お姉ちゃんひどくない？」

「今のはちよっとひどいかもね」

「でしょ? やっぱきいちゃんは話がわかるね! チューすればい

いじゃ」

「やめい!」

「しっしっ」

「おーい、きい、朝飯作って〜」

「あ、はいはい」

きいちゃんの愛のボディーパーローを食らってあたしがお腹を押さえてる間に、篠塚姉妹はリビングに行ってしまった様子。つまり今あたしはきいちゃんの部屋に1人! 何かしたい、何かしたいけど……腹がいたい。

あたしが腹痛のあまりうずくまって苦しんでいると、リビングから声が。

「まみちゃんー、もう朝ごはん食べてきた？」

「……や、食べてない」

「じゃあまみちゃんの分も作っとくね」

「……ありがとう」

さすがきいちゃん……ボディーブローが鳩尾に綺麗に決まって動けないよ。

ってか朝ごはん、朝ごはんか……きいちゃんの作った朝ごはん。

きいちゃんの手料理……手料理……ラブラブ……愛……新婚……夫婦！ よくわかんない連想ゲームだと思ったあなた、まだまだガキね！

ってそんなことより、未来の嫁の手料理を食べにいかないと！

腹痛も忘れてリビングへ走ると、さつきお姉ちゃんが朝ごはんを食べ始めていた。

「きい、まみ来たぞ」

「あ、うん。ちょっと待っててねー」

「はい」

なんか、なんかいいなあ、この感じ。まるで夫婦みたいなの、まるで家族みたいなの！ ってことはさつきお姉ちゃんはホントにお姉ちゃんになるわけだね？ そろそろちよつとしつかり挨拶しとかないかね。

「お姉さん」

「……なんだよ気持ちわりーな」

「妹さんを僕に下さい！」

「やらん。ってかお前が言つとシヤレにならん。やめてくれ」

「シヤレじゃないよ！」

「それをやめろっつってんだよ！」

「ん？ どしたの二人とも」

「聞いてよきいちゃん！ お姉ちゃんがね」

「聞かんでいい！」

「ぶがぶが！」

お姉ちゃんに口を防がれて喋れない！

「……？ 変なの。まみちゃん、ご飯ここに置いてくよ。」

「うん！ ありがとう！」

「おま、いつの間に！？」

きいちゃんにプロポーズもしなきゃだけど、それより今は手料理を！

でもこれで終わると思ったら甘いよ、さつきお姉ちゃん……あ、この大根超おいしい。

第15話 行動的少女真水、後（前書き）

ふと見てみたら、この小説をお気に入り登録してくださっている方が数人おられることに気づきました。

お気に入り登録してくださっている方々、本当にありがとうございます。これからも頑張りますので、どうか小説ともども、温かく見守っていただけたら幸いです。

それでは本編をどうぞ。

第15話 行動的少女真水、後

どうも、引き続き真水です。

時刻は12時を過ぎまして、さっきお昼ご飯を食べ終わったことです。あ、もちろんきいちゃんちで。

お腹いっぱいになったあたしとさつきお姉ちゃんは横になって休み、きいちゃんは洗い物をしています。

「あ、そーだ。お昼も過ぎたし、ひみこちゃん呼ぼうよ」

と、洗い物を終えたきいちゃんがこつちに来ながら言いました。

「ひみこ……？ あ、あのちっちゃい黒髪の子か。あの子可愛いよな」

ん？

「だよー。しゃべり方はちょっと独特だけどね」

なんだと？

「ちよつとちよつと、待ってよ二人とも」

「へ？ どしたの？」

「今、誰が可愛いって？」

「いや、だからひみこちゃんが」

「あたしのが可愛いだろうが！」

「……は？」

口をぽかーんと開けているきいちゃんとすごい怪訝そうな顔で見
てくるお姉ちゃん。まったくわかってないなあ。

「だからさ、あたしのがひいちゃんより可愛いでしょ？」

「何をわけのわからんことを言ってるんだお前は」

「わかるよ！ わかりすぎて逆にわかんないくらいだよ！」

「じゃあわかんないんじゃない？」

「そーだよわかんないんだよ」

「なんだこいつ腹立つな……」

なんかわかんないけどお姉ちゃんはイライラしてるみたいだね。
きいちゃんは呆れた表情をしている。呆れたきいちゃんも可愛いなあ
もう！

「どうしてきいちゃんはそんなに可愛」

「ぴんぽーんじゃ……」

……邪魔された。あたしの落とし文句が。せつかくきいちゃんの
ハートを射止めるところだったのに。しかも、この声は……

「あ、ひみこちゃん！ ちょうど良かった、呼ぼうと思ってたよ」
「だったんだよ」

「ほう、わらわに何か用かの？」

「や、別に用はないんだけど、ただ遊びたいなって思って。ひみこちゃんはどうしたの？」

「わらわも特に用はない！」

力強いな。

「ってかひいちゃん来たし、ちょうどいいや！」

「よし、それでは皆の衆、注目ナリ！」

「……まみちゃん、何よその言葉づかい」

「や、別に何も？」

「……ああ、そう」

なんかわかんないけど愛しのきいちゃんもイライラしてるみたいだね。みんなカルシウム足りてないのかな？

「ま、なんでもいーから注目。えー、これでは、それより『可愛い子、この指とおまれっ』選手権を開始します！」

「……ツッコミどころが多すぎるのでスルーします」

「えー！？ つっこんでよ！ それじゃきいちゃんのいる意味ない

「じゃんか!」

「あー、それはわかる」

「お姉ちゃんまでなんでだよ!」

「ほう、おぬしはつつこむためにおるのか。特攻隊とやらだな」

「ちがうよ!」

「うぬぬ……ひいちゃん、なかなかのポケだね。あたしも負けてらんない。」

「あるいは類人猿だね」

「意味わからんわ!」

「ほう、おぬしは類人猿なのか……」

「ちがうよ!? ひみこちゃんちがうよ?」

「で、可愛い子がどうのって何なんだ?」

「は? 何の話?」

「いや、お前が言ったんだろうが」

「あ、そうだった」

完璧に忘れてたよ。

「それじゃ、可愛い子……がどうのここの選手権を開始します！」

「ぐだぐだだなオイ」

「まあいいじゃん！ えー、ルールは簡単。自分が最も可愛いと思う子を投票して、一番多く票をもらった人は何でも一つ願いを叶えられるー！」

どーだ、とビシツと指差してみたけど、ひいちゃん以外の反応は悪いね。

「なるほどな。ではやってみようではないか」

「ええ！？ ひみこちゃんやりたいの？」

「うむ、面白そうじゃ」

「まあひみこちゃんがそう言うなら……」

「ふふふ、じゃあ始めるよ？ まずこの紙に誰が一番可愛いか書いてー」

紙を渡すとみんなしぶしぶ書き出した。あ、ひいちゃんはもちろんノリノリで。

1分も経たないうちにみんな書き終えたみたいだね。

「はい、じゃあこの箱に入れてー」

「はいよ」

「はい」

「ほれ」

「ん、全員入れたね。じゃあ集計するよー」

ふむふむ……こ、これは！

「全員一致で真水ちゃんがゆうしょぐふっ」

「だまれ」

さつきお姉ちゃん……ゲーはひどいよ。

「えー、どれどれ……」こ、これはー！

「何やお姉ちゃんまで……あ、あれ！？」

「なんじゃ、何事じゃ」

「いや、コレほら……ひみこちゃんが2票でまみちゃんが2票じゃ
ん！」

「んなわけねーだろ！ おい、きい、お前誰に入れた？」

「ひみこちゃんだよ」

「ひみこちゃんは？」

「わらわはまみに入れたぞ」

「え、じゃあお姉ちゃん、まみちゃんに入れたわけ!？」

「んなわけねーだろ！ あたしはちゃんとひみこちゃんに」

「ふっふっふっふっふっ」

「……何？」

ゲンコツの痛みが引いてきたところで不敵に笑ってみせると、みんなが変なものを見る目であたしを見てきた。まあいつも通りそんなことは気にしない気にしない。

「なんと、なんとなんと！ まみちゃんの2票目はまみちゃんが入れたのでした！」

「はあ!？」

「自分で入れんなよ」

「逆転の発想じゃな」

「いや逆転ってか反則でしょ!？」

「いやいや、誰も自分に入れちゃダメとは言っていないじゃん！」

「でもこーゆーのは自分に入れちゃダメって決まってるでしょ!」

「そんな常識に捕らわれてるからいつまで経ってもきいちゃんはペ

「チャパイなんだよー！」

「何をー！？ あんただって全然ないじゃん！」

「あるよー！」

「嘘つけー！」

「……ひみこちゃん、あっち行こっか」

「うむ」

「で、ひみこちゃんはどんな願いを叶えたいの？」

「そうじゃな……まあ、一番はやっぱり戻りたいのー」

「……戻る？」

「それが無理なら……そうじゃな、何か髪飾りが欲しいかのぉ」

「ふーん……髪飾り、か」

「きいちゃん！ もう、そんなこと言ったらチューしちゃうよー！」

「なんでだよー！」

「唇を重ねあえば……いいじゃないー！」

「やだよー！」

「..あまわし」

「..ちんき」

「..うせーな」

第16話 それぞれの戦い

どうも、日和です……すみません、ちょっと余裕ないです。
現在なんと中間テスト中。そのため他のことを考えてられないんです。

ちなみに今解いているのは英語。さつきちゃん、見かけによらず問題は凝ってる……ん？

「あれ、この問題……見たことある」

あ、そうだ。この前授業でやったとこだ。ラッキー！

「そうそう、ここはちょうどいつちゃんが答えたところ……だから」

答えはわかる。答えはわかるんだけど……！
書けないよ！ ってか書きたくないよ！

「うがー！」

「日下部、うるさい！」

「……すみません」

はあ……この調子じゃ英語は期待できそうにない。いや、英語も『かな。……はあ。』

どうも、弥生です。あ、まーちです。

今中間テスト中です。教科は国語。1時間目の英語は完璧に寝てたから今度はがんばらなあかんのや！

「えー、なんやて？」

問題は四字熟語みたいやな。に当てはまる漢字を答えなさい、か。

『第一問、肉食』

これはベタな問題やな！。焼肉定食、とか書いてほしいんやろうけど、そうはいかん。もちろん答えはアレや。

『第二問、天地』

ふふふ、これもわかるんや。ドラマも見たし完璧や。

『第三問、一刀』

なんや、どれもこれも簡単やな！。こりゃ悪いけど国語は高得点かもしれんわ！

どうも、乙香です。

現在テスト中、教科は数学です。

「あ、これわかる。これもこの前やったとこだ」

なんだ、結構簡単だなあ。これなら高得点が狙えるかも……え？面白くない？ いや、そんなこと言われたって……

「はい、質問ある人ー」

あ、杉沢先生が廻ってきた。と思っただら即座に手が上がった。

「はい！ はい！」

「……はい、日下部」

すごく嫌そうに日和を当てる杉沢。あんなに露骨なのに日和は気づいてないんだからすごいよね。

「うにやちゃんって酒飲んだら人変わるって本当！？」

「はあ！？ そんなこと誰が言ってたの！？」

「さつきちゃん！」

「……まああいつしかいないか。あのね、テスト中にこんな話すんのも何だけど、私は別に酒飲んだって何も変わりません。そりゃ酒飲んだ時の記憶は全くないし、飲んだ次の日は家具が壊れてたりするけど、全然大丈夫です！」

「へえー」

いや全然大丈夫じゃないだろ！ それ確実に自分で暴れまわってんじゃない！

……やっぱりこの学校は変な人多すぎる。だからホラ、私ぐらい普通じゃないと……ね？

とか考えてたら解き方忘れた！

「あーもうー！」

「しるさい桜馬ー！」

「……………すいません」

あー……………最悪だよホント。

きーんこーんかーんこーん。

「はい、そんじゃ中間テストはこれで終わり。おつかれー。じゃ、さいなら」

「さようならー！」

どーも。さつきだよ。テストが終わって生徒は元気いっぱいみただけど、あたしら教師はこれからが地獄なんだよ。採点とかやつてらんねえ。でもやんなきゃダメだよなー。

「あーめんどくせえ……………お」

これ、日和の答案じゃねーか。ちよつと採点してみるか。
どれどれ……………なんだこいつ、全然書いてねーな。問一、問二、問三……………お、問四はちゃんとやってる。あ、これ授業中にやったやつそのまんまで出したからな。さすがにわかるか。どれどれ？

「『私は日和のことが好きではありません』お、ちゃんと出来て……………あら？」

なんか括弧をつけてそのあとに何か書いてあるな。

「えー」私は日和のことが好きではありません（と言ってみたが心

の中は彼女一色であった彼は、その愛情を余すことなく彼女に捧げ
ることを誓った。』」

……なげえよ！　そこはかとなくなげえよ！　そしてうぜえ！
なんだこれ！？　バツでいいかな？　いいよな。　つてかバツだよな！
おもいつきり解答にバツ印をつけてやった。　こんなに気持ちよく
バツをつけたのは初めてだよ。

とかちよつと憂さ晴らしをした感じで気分爽快だったあたしに、
またしても魔の手（？）が……

「ちよつと、篠塚先生？」

「はい、なんでしょー」

上品そうな国語の……何て名前だっけな。　たしか山田……山田だ
った気がする。　山田先生に呼ばれて振り返ると、すごい微妙な顔を
して答案を見せられた。

「どうしました？　山田先生」

「これ木更津さんの解答なんですけど……つてか私山田じゃないで
す。　未廣です」

「はあ。　まあそれは置いてうちのまーち……いや木更津がどう
かしました？」

「あ、そうなんですよ。　ここの解答なんですけど」

そうやって見せられたのは四字熟語の問題。　どうやら　に漢字を

入れるらしいな。

「木更津さんの答えが……なんと言いますか……とりあえず見てく
ださい！」

「え、ああ、はあ」

なになに？ 『第一問、肉食』か……これはさすがに……い
や、こ、これは！

「『牛肉夜食』……だと!？」

「そうなんです。たしかに発想はすごいんですけど……」

「ですよ。牛肉を夜食に食ったら胃がもたれますよね」

「いや、そういう問題じゃないですけど」

「ですよー。で、次は『天地』か。これも簡単なはずですよ
ね」

「まあ一般的には。でも木更津さんは……」

「なになに……で、『天地人』!？ に埋めてないし!」

「はい……で、最後が」

「まだあるのか……最後は『一刀』ねえ。で、まーちの答えは
……なんだこれ、消しゴムで消された跡がすごいな」

「すごい迷ったみたいなんです」

迷ったってことは答えにいくつか候補があったのか？ あの問題で……

「で、結局答えは……『一刀百万』か。……どういう意味だ？」

「それは裏を見ればわかるかと……」

裏？ 言われた通りに裏返してみると、沢山の文字が書かれていた。

一刀十円、一刀百円、一刀千円、一刀二万、一刀十万、一刀百万、一刀千万、一刀一億、と書かれていて、一刀百万だけが丸で囲ってある。

値段……値段で……決めたのか……。

「なんていうか……一刀百万って、その……だ、妥当ですね！」

「……そ、そうですね」

「あ、あは、あはははは」

「うふ、うふふふ」

なんていうか……

作り笑いしてるしかなかった。

第17話 ざ・授業参観

お久しぶりです。優菜……いや、うにやです。もういいです。

只今、平日の午前10時。なのに私は学校にいません。あ、学校にはいるんですけど、中学ではないんです。なんと小学校にいるんです。その原因は、もちろんこいつ。

「なんだようにや。怖い顔して」

「なんだよじゃないわよ！ なんであたしを連れ出すかなー」

「いいじゃん。きいも来てほしがってたぞ？」

そう、小学校で何してんのかっていうと、簡単に言うと参観です。きいちゃんのですけど。親がどこにいるかわからない(さつき曰く旅に出てるらしい)この姉妹は、親のことはいつも代わりにさつきがやってるんです。あ、家事以外は。

「ていうかね、さつき。私は今日休みだからいいけど、あんた授業あつたんじゃないの？」

「全部自習にしてきた！」

「ちょっと！ ダメじゃないの！」

「でも……きいが可哀想で」

「うそつけ」

「授業をサボりたかったとかめんどくさかったとかそういうのは全然ないよ？」

「うそつけー！」

「まったく……うには疑り深いなあ」

「あんただからよー！」

まったくもう。こいつはホントにいつまで経ってもガキなんだから。

「あんたね、そんなんで教師やってけると」

「しっ！ 授業始まるよ？」

「……………」

そう言ってニヤリと笑うさつき。びっくりするぐらい腹立つ笑顔だな。

でもさすがにそれは本当だったみたいで、すぐに先生が教室に入ってきた。あれ？ なんかあの人見たことあるような……………

「はい、生徒ども。その保護者ども。今日は生徒も保護者も一体となれるような授業を目指します。よろしくー」

「よろしくお願いします！」

「……………」

いや、知らない。あんな人は知らん。絶対知らん。もう知らないことにした！

型破りすぎる先生の発言に唾然とする保護者をよそに、生徒たちはごく普通に対応している。どうなってんだこれ。さすがのさつきも顔をひきつらせてる。

「ちょっとさつき、何なのあの人」

「いや……型破りだとは聞いてたんだけどさ。まさかここまでとは」

さつきにこうまで言われる人も珍しいわね。ホントこの人……

「よく先生になれたな」

「あ、私もおんなじこと考えてた」

「そりゃそうなるよ」

……ん？ よく考えたらさつきも……いや、今は何も言つまい。私とさつきがこそそとしゃべっていたうちに授業は進んでいたらしく、生徒が文章の朗読を順番にやってるみたい。

「うんとこしよ、どっこいしよ。それでもかぶは抜けません」

「はあい、ありがと。んじゃ次、成瀬さん」

「イエス、サー」

……あれがさつきの言ってた『問題児』か。真水ちゃん、だっけな。いきなりボケをかましてきたけど、全員スルー。それにも動じ

てない様子ね。

「えー、おじいさんはおばあさんと呼んできました。うんとこしょ、どっこいしょ。それでもかぶは抜けません。すると、おばあさんは気を溜め始めました。そして『私の戦闘力は53万です』といいながら、指先から光線を発射しました。それでもかぶは抜けません」

……なんの話！？ 奇抜すぎるでしょ！

「へえー。斬新なお話だなあ」

「いやおかしいでしょ!?!」

「おかしくはないだろ」

「逆におかしくないところがないわよ!」

「ちょ、うにゃうるさい」

「へ？ あっ、すみません!」

気がついたら大声で話してしまってたらしく、周りの視線を浴びていた。恥ずかしくなっついで下を向いてしまっつ。

「まったくー」

「……ごめん。でも外ではうにゃって呼ばないでっつてんでしよ?」

「へ？ あたしは言っつてないけど」

「え？ でもさつき……」

言いかけたところで先生がものすごい笑顔でこっちを見ていることに気づいたのでやめた。口は笑顔だけど、目はまったく笑ってなかったから。

なんかわかんないけど、あの人滅茶苦茶怖いんだけど。

「はい、じゃあ成瀬さんの意味不明の朗読が終わったので、続いて加古川さん」

「うむ」

あ、あれはさつきが珍しく『可愛い』と言っていた卑弥呼ちゃんだっけか。すごい変わった名前よね。

その卑弥呼ちゃんは立ち上がって教科書を持つと、力強く読み始めた。

「おばあさんは！ 息子を！ 呼んできました！ うんと！ こしよ！ どっこ！ いしょ！ それでもかぶは抜けぬ」

「はい、若干意味不明のアレンジしてくれました。ありがとー」

さつきから生徒をけなし過ぎのような気がするんだけど……あれはいいのか？

「あ、ちなみに意味不明つてのは良い意味なんで。教育委員会うんぬんには連絡しないで下さいね」

あれ褒めてたの！？ ってかそんな裏話を赤裸々に言っちゃダメ

でしょ！

「あー、その気持ちわかる」

「……あんたはそうだろうな」

こいつらダメだ。これがゆとり教育の末路か。

と、私がつめ息をついていると、どうやら授業もまとめに入ったみたいで、今日の授業の感想なんかを生徒に聞いていつてるみたいだ。

「はい、じゃあ次、篠塚さん」

「はい」

あ、季実ちゃんが当たった。季実ちゃんならまとも……あ、もしかして今までの流れで季実ちゃんもボケを！？

「今日の感想、よろしくー」

「……えー、もっとまともな生徒とともにまともな先生に習いたかったです」

「はあい。ありがとー。あれ？ みんなも保護者の方々もそんなに何度もうなずいてどうしたんですかー？」

これが、生徒と保護者が最も一体となった瞬間でした。

「いや、あたしは面白いと思うけどなー」

「……あんなだけだよ」

第18話 良からぬ予感（前書き）

ここから3話くらいは多少真面目な話が入ります。……多分真面目です。

まあ基本コメディ調なんでたいして変わらない可能性は大きいですが
それでは本編をどうぞ。

第18話 良からぬ予感

「どーも、さつきです。」

「今日も今日とて教師やってます。まあ給料もらってるんでね。それが無きゃやりませんよこんなことは。」

「とまあ愚痴はこのぐらいにして、朝礼に行かないと。」

「はい、おはよー」

「おはようございますー!」

教室に入ると、元気な声が帰ってくる。毎日元気なこった。特にこのE組は。

「えーと、じゃあ出席とってくぞ。まず……愛葉」

「……あら?」

「愛葉ー、おい、いねえか? 誰か休むとか連絡聞いてない?」

「……………」

「聞いてみたけど返答はない。何? みんな照れてんの? とか思ってたら匂がおずおずと手を挙げた。」

「さつき姉ちゃ……先生。あの子なんかちょっと怖いし、あんまり喋ってる子がいなかったよ。だからあんまりわかんないんじゃないかな」

「ふうん……まあフケてんのかね」

「えー!? 老けてたら学校来ないの!? じゃあなんでさつきちゃんに来てんの?」

「違うわよ。フケてるってのはサボってるってこと。ってか聞こえたらしばかれるよ?」

日和はひそひそ話をしてるつもりだったのか知れないが、丸ぎこえだっつての。

「……聞こえてるよ」

「え? つぎちゃん!」

「……すいません遅れました」

「ん?」

あたしが日和を出席簿で叩こうとした瞬間、ドアが開いて目付きの悪い少女が肩で息をしながら入ってきた。

「あ、愛葉。やっと来たか。てつきりサボりかと……ってお前、その顔のケガどうした?」

「……………」

愛葉は何も答えずに俯く。

「おい」

「遅刻したことはすみません。顔のケガはちょっと道でコケただけです」

「……そうか」

それだけ言うと、愛葉ははや歩きで自分の席まで行ってすぐ座ってしまった。

「……そんじゃま、出席の続きいくぞー」

……愛葉、何か面倒に巻き込まれてなきやいいけどな。

そんな心配しつつも出席をとり、いつもどおり授業へ。あたしは英語の時間しか見てないが、少なくとも英語の時間の愛葉は上の空といった感じだった。放課後にも話、聞いてみるか。

そう考えながら全ての授業を終え、やっと終礼の時間に。今日は授業が余計に長く感じたよ。

「そんじゃ、今日はこれで終わり。さいならー」

「さよーならー!」

「あ、愛葉」

挨拶をするとすぐ、俯いたままそそくさと帰ろうとしていた愛葉に声をかけた。

すると愛葉はピタリと動きを止めて、顔は俯いたまま、体だけこちらを向けた。

「……何ですか」

「お前、何か面倒に巻き込まれてねえか？」

「……………」

返事がない。ただのしかばねのようだ。いや違うけど。

「どうした？」

「……………いえ、なんでもありません。別に面倒にも巻き込まれてません」

「じゃあこの顔の傷はなんだ？」

「だからそれは朝にコケて」

「お前な、お前の運動神経でコケて受け身取れねーわけないだろ。体育の先生のお墨付きだ」

「……………」

また愛葉は黙りこくる。……………どうしたもんかねえ。

「……………まあ、言いたくないってんなら別にいい。あたしもあんたらぐらいの頃は人に言えないようなこと散々やったよ。……………いや散々はないな。ちょっとはやったよ」

「そう……………ですか」

ちょっと声色が明るくなったような気がせんでもないかな。何にしろ今日は話してくれそうにはないな。

「うん。ま、話したくなったら言ってくれりゃいいよ」

「……はい」

俯いたままだが、愛葉の声からは、ちょっと安心したような気持ち
ちが伝わってきたような気がした。

「そんじゃな」

「はい……さよなら」

そう言つと愛葉は逃げるように去っていき、帰っていく生徒たち
の波に姿を消した。

「……はあ」

ため息をついて、机に座り、膝に肘を立てて頬杖をつく。外を見
ると、運動部の生徒がだんだんと暑くなってきた中で汗を流してい
る。それに比べて木々は日射しを浴びて喜ぶかのように、風に吹か
れて揺れ動いた。

「どうしたの？ あんたがため息なんて、らしくないわねえ」

「あ、うにゃか。あたしだって悩みぐらいあるよ」

本気で物珍しそうにするうにゃに、あたしは力無く答える。それ
を見てうにゃも表情が変わった。

「で、何なの悩みって」

「……なんかさ、愛葉のやつがちょっと面倒に巻き込まれてるみたいなんだよね」

「愛葉？ あー、あの子か。そっぴや噂を小耳に挟んだよ」

「どんな？」

「なんかちょっとあっち系のグループと絡んでるところを見たとか」

「あっち？ そ、それは所謂……同性愛？」

「どっちだよ。じゃなくて、ヤンキーとかそっち系の」

「ああ、そっぴう。って、この辺のそっぴうグループって言ったらず……」

「うん、もしかしたらもしかするかも……」

話をしていると、だんだんあたしもつにゃも顔色が悪くなっていく。多分つにゃもいろいろと思いついてるんだろつな。

「ま、まあまだそつと決まったわけじゃないんだしさ」

「そ、そつよね！ 希望は捨てちゃダメ」

『ピンポンパンポン』

そつやつてあたしとつにゃが互いに頑張って励まし合っているよ、校内放送が鳴り響いた。

「えー、オホン。篠塚さつき、杉沢優菜。校長命令だ。校長室まで至急こい」

『ピンポンパンポン』

「……………」

「……………」

あたしとつには汗をだくだくとかいた顔を合わせ、諦めたようにうなづく。

「行く……………」

「……………」

重い足取りで歩き出した二人だったが、二度目の校内放送で全力で校長室まで走ったという。

第19話 酔いどれさつき

どーも、季実です。

平日の今日はいつも通り学校に行ってきました。帰りはまみちゃん、ひみこちゃんと一緒に帰っています。

「あ、そうそう。そういえば、アレ見た？」

と、まみちゃんが突然喋りだしたので私とひみこちゃんはまみちゃんの方向を向きます。まあまみちゃんのことだからまともな話じゃないと予想しながら。

「アレって何よ」

「アレはアレだよ。ほら、あの日曜7時からやってる……あ、人面戦隊鳥人間達」

「見ねーよ。ってかなんだよそれ」

「おお、見たぞ」

「見たの！？ ひみこちゃん見たの！？」

「あ、ひいちゃん見た？ ヤバかったよね、この前の。ブロイラーレッドと閑古鳥ブラックの戦い！ 興奮したー」

「レッドの必殺技、竜田揚げフライアウェイは何回見てもかっこいいのぉー！」

……なんだこの会話。意味わからん。

理解不能の会話についていけずおいてかれた感じになりながら歩いていっていると、不意にまみちゃんに話しかけられました。

「そうそう。ブタバタンのポークビッツアタックが……あ、ポークと言えはきいちゃん」

「なんでだオイ」

「いや、だってこの前2キロ太ったって」

「ちよつと待て！ 何でそれ知ってた！」

「まあ気にすんなよ。それよりさ、今日きいちゃんち行っていい？ ひいちゃんも行くよね？」

「うむ、いいぞ」

「……別にいいけど。ってかそれより何で体重のこと知ってるのさ？」

「ふふふ……それは秘密です」

「ちよつと！ 教えてよ！」

そんな感じでドタバタしながら3人で私の家に帰宅。多分、お姉ちゃんも帰ってんだろうな。

そう思いながら家に入ると……お姉ちゃんの靴が。案の定もう帰ってるみたい。

「ただいまー」

「おう、おかえり」

「うわ！ 酒くさっ！ お姉ちゃん、飲んだでしょ？」

「あたりまえだの……クラッシュ！」

「ぐふっ！」

……のっけから何もしてないのにまみちゃんが思いっきり殴られちゃったよ。今はさすがにひどい気がする……。

「ちょっとお姉ちゃん！ 何かしたならわかるけど、何にもしてないのに殴ったら可哀想でしょー」

「大丈夫だって。まみだし」

「そんなことないよー。まみちゃん、大丈夫？」

「ありがと、きいちゃん……。あの、もうちょい近づいて」

「へ？ なんで？」

「その唇を……奪いたい」

……こいつは。ちょっと心配したらこれだよ。

「やだよー！ もう」

「まみ、おぬし今なんと？」

「や、だからきいちゃんの唇を奪いたいんだよ」

なんでひみこちゃんはそのそんなに興味津々なんだ？　なんでまみちやんはそんな普通に答えるんだ！？

「唇を……奪う？　それはなんとという拷問じゃ？」

「拷問ちゃうわ！　むしろご褒美だよ！」

「ご褒美ではねーよ」

「いや、でも唇を削ぎ落とすのはかなりの痛みが」

「ストップ！　何かいろいろおかしいよ！」

「うつせえぞお前らあー」

私たちがわーわーと喧しくしていると、酔っぱらいのお姉ちゃんは何か言いながらビールの空き缶をいっぱい投げてきた。

「いたっ！　顔に当たっ……いたっ！　す、すねに……いたっ！」

私たちというか、まみちゃんに投げていた。

「さつきお姉ちゃん！　集中攻撃はひどいよ！」

「じゅるへー」

「いたっ！」

力の抜けた声の割にはすごい強さで空き缶を投げてくるお姉ちゃん。しかもあたると痛いところを的確に狙っている。

「小指いたっ！ ああああ！ ファニーボオン！」

「あっはははは！ はは、は……ぐう」

……んで寝るし。もう、ホントどうしたんだろ？ お姉ちゃんがこんなに飲んで荒れるなんて久しぶりな気がする。大体何か悩み事が原因なんだけど、お姉ちゃん言わないしなあ。

「まったく、人にこんだけ危害を加えといて寝るって。ホント、きいちゃんだったら襲ってるよ」

「いやホント、やめてください」

「……ば」

「ん？」

今何かお姉ちゃんが言ったような気が。

「ホント、ファニーボーンは痛いっての」

「しっ！ ちょっとまみちゃん静かに！」

「へ？」

不思議そうな顔をするまみちゃんを無視してお姉ちゃんの言葉に耳を澄ませる。

「……………愛葉」

「アイバ？」

「あいば？ 何それ？」

「いや、お姉ちゃんが今寝言で言ったの」

「寝言で、ねえ。寝言で人の名前を言うってことは、もしかして……………」

「恋、じゃな」

「え？」

瞼を閉じたまま、ひみこちゃんは静かにそう言った。まるで仙人のようなオーラを出しながら……………！

「恋、ですか？」

自然と言葉遣いも敬語になってしまう。恐ろしきひみこちゃんパワァー！

「そうじゃ。さつきはアイバという名の者に恋をしておるのじゃ」

「……………あのお姉ちゃんが、恋」

「あたしはきいちゃんに、恋……キヤツ、いつちゃった！」

まみちゃんは、無視しよう。

私はお姉ちゃんの方にまっすぐ向き直った。

「お姉ちゃん、応援してるからね！」

「お姉ちゃん、応援しててね！」

もう一度思った。

まみちゃんは、無視しよう、と。

「さつきの恋も、まみの恋も実ることを祈っておる！」

「ちょっと待て」

第19話 酔いどれさつき(後書き)

コレ真面目か？

…まあいいか。息抜きってことで。

第20話 教師と生徒・前編・

「はよぞいまーっす」

「おはよづございますー!」

どーも、さつきです。

いつも通り8時半に教室に入ると、挨拶が帰ってきた。こいつらはどーゆー気持ちで挨拶してんのかねエ？ 社交辞令か？ と思つて自分の中学生の頃を思いだそうとしたら思い出せなかつたんですよ。いやいや年食つたとかそういうんじゃないよ？ まだまだ18なんだし若い若い。うんうん。

「さつきちゃん、何で一人で頷いてんの？」

「え、いやいや何でもない何でもない。そんじゃま、今日も出席とんぞー」

そう言つて窓際の席を見て少しブルーな気分になる。窓際が一番前の席は、空いていた。

「……愛葉、また休みか」

これで愛葉の欠席は3日連続になる。見た目は不良っぽい割に遅刻も欠席も一度もしなかつたあいつが何で今更……とか考えてみたけど、日和が不思議そうな顔でこつちを見るのに気づいて我に帰つた。生徒は何十人もいるんだし、一人の生徒だけを特別扱いするわけにはいかんよな。

「ごほん。そんじゃ次」

いまいちスッキリしない気分のまま出席をとりおえる。

朝礼はそれからまもなく終わり、あたしはE組から出た。廊下を歩いている間も上の空だったらしく、後ろから声をかけられてるのに全く気づかなかつたほどだ。

「ちょっとさつき、聞いてんの？」

「え、ああゴメン」

「あんたがぼーっとしてるなんて、珍し……くはないけど」

「オイ待て」

「冗談冗談。で、また愛葉さんのこと考えてたわけ？」

う。うにゃはこついうときはホントに察しがいい。もう心読んでんじゃないかってくらいだ。

「心は読んでないわよ？」

「いや読んでるだろ今のは確実に」

「何で倒置法でしゃべんのよ。大体そんなこと考えてるだろうと思つてね。あんた単純だし」

「最後のは余計だけど、当たってるよ」

それから少し間が空く。廊下を歩く足音がやたらと大きく聞こえ

てきた気がした。

「それにしても、あんたが人のことそんなに気にかけるなんて、珍しいわねー」

「……そうか？」

「そうよ。中学ん時なんて唯我独尊って言葉がピッタリだったもん」

「ひどい言われようだなオイ」

「ま、何か理由あったのことでしょうけど」

そう言つてうにやはこつちを見る。何故かわからないけど、あたしは自然と視線を外していた。

「……なんかさ、似てんのよね」

「何が？」

「いや、あたしと愛葉がさ。不器用ってかなんて言うかそういうところが」

「不器用ねえ……あんたはどっちかって言うと不器用というより雑つて感じだけど」

「オイ」

言つてから、うにやは笑った。あたしもそれを見て笑う。中学の時から全く変わってない……気がする。中学のことなんて覚えてな

いんだけど。

「たしかにあんたと愛葉さんは似てるかもしれないけど、決定的に違うところがあるのよ」

「へえ、それあたしも思ってた。で、どこ？」

あたしのその質問に、うにゃはニヤリと笑う。そして十分に溜めてから、ゆっくりはつきりこう言った。

「愛葉さんは、勉強が出来る」

「……………まじ？」

あたしのその時の顔は、鳩がライフル食らった顔だったと誰かが言ってたような気がしないでもない。

「ま、愛葉さんのことが気になるのは分かるけどね、授業はしつかりやんなさいよ？ あんた、校長が『あの人』だから大丈夫だけど、教頭とかに歳のことバレたらヤバいわよ？」

「……………わーかってるよ」

どうもやりづらいなあ。そりゃ社会人になるってのはそういうことなんだろうけどさ、ちょっと殴ったらやれ体罰だやれぴーちーえーだつるさいんだよね。まあそれと年齢の話とは全くもって関係は無いんだけどね。

……………何はともあれ、今日も1日頑張りますかあ。

「のびー！」

「……………」

暗い気分を吹き飛ばすために敢えて口に出してのびを試みたら、
すごい可哀想な人を見る目でうにゃに見られた。やめてください。

「まあ、そろそろ夏だし、変になる人も増えてくるよきつと」

「その仲間が増える的な言い方はやめろ」

第21話 教師と生徒・中編・

「どうも、さつきです。」

授業も終わって、時計は5時50分を指しています。今日はうにやと二人で帰る予定のため、いつもよりちょっと長めのお仕事ですね。

「ふあー……ねむっ！　ねーうにや、まだ？」

「ちょっと待ちなさいよ。もうすぐだから。コレをこっつして……よし、出来た！」

「やっと終わったか！　あーしんど」

「あんた何にもやってないでしょ」

「いやいや、待つのがって実際に何かやってる人より断然しんどいと思うよ。コレほとんどだから。ってか何やってたの？」

「何ってあんた……期末テスト作ってたに決まってんでしょ？」

「……へ？」

「き、期末テスト？」

「そう。期末テスト。あんたも作ったでしょ？　もう明日からテストよ。」

嫌な汗が首筋を伝う。

「……いや、実は期末テストってなくなったらしいよ。何か、期末
つてのが世紀末っぽくて不安を駆られるからって」

「どんな理由だよ。名前変えりゃ済む話だろうが」

「いや、みんなそこまでは頭が回らなかったみたいだ」

「どこまでだよ。すごい初歩的なとこじゃん。ってかワケわかんない
言い訳しないで、早く作った方が良くないんじやないの？」

「うう……」

結局作んなきゃいけないのか……しかも明日までに。そんなの絶対無理だろ。

ものすごい暗い気分にあたしとは対照的に、一仕事終えたうにやは
はスッキリした顔をしている。何か腹立つなー、くそ。

「よし、そんじゃ帰ろっか」

「よし、そんじゃ今日はうにゃのおごりで」

「はあ？ 意味わかんないわよ。大体今日は私……ってあれ？」

うにゃは何かを探すようにキョロキョロと周りを見回し、自分の
ポケットというポケットを漁りまくっている。

「……なにやってんの？」

「それが、財布がないのよ。たしかにポケットに入れといたはずなの
に」

「財布？ どんかに落としたんじゃないの？」

「そうかも。たしか5時間目までは持ってた記憶があるから、6時間目に落としたのかな。6時間目は、ええと……あ、E組だ」

「あたしどこ？ そんなのなかったと思うけど」

「でも無かったら困るし、探しに行ってくる。ちょっと待ってて」

「え、あたしも行くよ。暇だし」

というわけで、うにゃの財布探しに行くことに。6時を過ぎた学校は薄暗くなってきたいてちよつと不気味だ。でも、なんとなく哀愁も漂っていて、なんだか懐かしい気持ちになる。

E組に着くと、すぐに二人で財布を探し始めた。下を見ながら歩いていると言ったって、二人で頭をぶつけるなんてベタなことは……

「がっ！」

「……なにやってんのよ」

「机に頭ぶつけた……」

「日頃から整頓するように生徒に言っていないから、そんなことになるのよ」

「えらそーに。うにゃだつて昔、成瀬に部屋に入られて『部屋散らかってるね』って言われてへこんでたくせに」

「ちよちよちよっと！　今はその話は関係ないでしょ！　何でその名前が出てくんのよ！」

「そういやプレスレットもらったとか言ってますごい嬉しそうにしてたのに、部屋を出るときにドアノブに引っ掛かってちぎれちゃって泣いてたこともあったよね」

「ぎゃー！　あんたは！　あたしのことすっかり忘れてたくせに何でそういうことは覚えてるかな！」

「いやー、何でか記憶がものすごいよみがえってきたよ。そういえば他にも」

「あああ！　あつたあつた！　財布あつたから！　もういい、いいです！」

「何大声出してんの。……あ、そこ愛葉のどこか。あいつ、連絡なしに3日休みだな」

話を切り替えてみると、うにやもやっと落ち着いて話し出した。つてか慌てすぎだったの。

「愛葉さん、妙なことに巻き込まれてないと良いけど」

「でも、睦美さん……いや校長にもああ言われたとこだし、やっぱり何かあるのかもしれないな」

「教師の私がこんなこと言っちゃダメなんだろうけど、ただのサボりであることを切に願うわよ」

「……そうだな」

そう言いながらあたしは、今朝うにゃに言われたことを思い出していた。本当に自分でも驚くぐらいに他人を心配しているあたしがいたのだ。唯我独尊とまではいかなくとも、自分勝手であることは自負しているあたしが、だ。

何か変な感じだな、とか思いながら何気なく愛葉の机に座ると、机が前に傾いてそのまま机ごとずっこけた。

「いだっ！ 腰、腰うつた！」

「ちよつとさつき、あんた食べすぎなんじゃないの？ 普通机って座っただけで前に倒れたりしないわよ」

「いや、違う！ 違うんだって！ こいつの机ん中、何も入ってなかったからだって！」

「あ、ホントだ。だからって言っても……ん？」

「どした？」

うにゃは急に話をやめて入り口が上を向いて中身が見える状態になった机の引き出し部分を凝視している。まるで目が悪い人がテレビを見るときみたいに……この例え、わかりづらいな。とにかく、うにゃは机の中を見ていた。すると、ふいに手を伸ばし、そのまま机の奥に手をつっこんだ。

再びうにゃの手が出てきてその手が開かれたとき、掌に乗っていたのは、見覚えのあるネックレスと、しわくちゃになった一枚の白い紙だった。紙には、殴り書きで『角木和菊花』と書いてある。

「なんだこれ？ 角木和……って人の名前か？ ってかこのネックレス、どこかで見たことあるような……あ、そうだ！ この前シメた中学生がつけてたやつだ」

「……あんたね、中学校教諭が中学生をシメてどうすんのよ」

「いや、あれは人助けだから仕方ない！」

「……はあ。まあいいわ。ってかあんた、これホントに覚えてないの？ ネットクレス型になってるけど、あんたもこのトップ部分だけは持つてるでしょ？」

「え？ いや、たしかにこの形は見たことあるけど……なんだっけ、これ。見た感じSとTが合体して作られたマークっぽいけど」

「そーよ。STといえば？」

「ま、まさか……」

「……」
「うにゃが無言で頷く。」

「やっぱり、やっぱりそうなのか。ST、それは……『スペシャル・トップリング』のことだったのか！」

……10秒ほど、無の時間が訪れた。カラスが鳴く声が、まるで耳元で叫んでいるかのように大きく聞こえる。無の時間の後、うにゃはしっかりとさきりこ言った。

「アイス屋か！」

……ん。

第22話 教師と生徒 - 後編 -

3日前、校長室前。

どうも、さつきです。えー、あたしとうにやは今、緊張の面持ちで校長室の前に立っています。心拍数がヤバい気がします。

「……さ、さつき、早くノックしなさいよ」

「あ、あたしがすんの！？ うにやがしなよ」

「無理に決まってんでしょ！ それだったらまだ1年置いといたゴキブリホイホイの中身見るぐらいのがマシよ！」

……すごい例えだけど、たしかにわかる気がする。

なんでこんなふうにやとあたしが校長室にノックするのを拒んでいるのかというと、それは校長に原因があるわけで。

「……じゃあ、あたしがノックするから、帰りに何かおごってよね」

「……いい、いいわよ」

「……よし」

ふう、と息を吐いて精神統一する。そしてノックを2つ。

「失礼しま」

「おそおおおいいー！」

「わああ!?!」

「きゃあああ!」

ドアを開けようとした瞬間、ドアが思いっきり吹っ飛びました。そして粉々になりました。

「……あ、えと」

「オイ、さつき、優菜。お前らアタシがなんつったか聞こえなかったのか?」

「えと、至急、校長室に来るようにと」

「そーだよ至急なんだよ。至急つてのは3秒以内なんだよ。でもてめーらが来たのは5分経つてからなんだよ。お前、5分つてさカツプラーメン作れるどころか麺がふやけて来るぞ?」

「い、いや、でも5分のカツプ麺もあります……よ?」

「や、アタシそれは3分で食うから。待ってられんし」

「は、はあ……」

一体何の話をしてるのかわからなくなってきているが、そんなことつつこめない。この人にツッコミを出来る人なんているんだろうか。

「あー、話がそれたな。で、お前らを今日ここに呼び出したのは他

でもない。実は『スケアスレット』が最近かなり荒れてきてるらしい」

ん？ 今何か聞き慣れない英単語が出てきたような……

「スケアス……何ですか？」

「ああ!？」

「いえ！ あの!」

「ちょっとさつき！ 『スケアスレット』よ。私たちや睦美さんが入ってた、えーと、治安維持グループ!」

「あ、そんな名前だったっけ。ってか治安維持グループというかただの暴走ぞ」

「治安維持グループだ! ……だろ？ さつき?」

「……は、はい」

それ以上何も言えなくなる目でこちらをにらんでくる睦美さん。この人の横暴さは本当に中学時代から変わっていない。怖さも。

「……また話がそれたな。で、だ。とりあえずスケアスレットの後輩どもをいっぺんシメてこい」

「へ？ わ、私たちがですか？ いや、それはさすがに……ねえ、さつき?」

「え？ あ、うん。そ、そだな」

「……さつき？」

「いや、あたしは何もやってないよ！」

「あんたねえ……」

「オイ」

「は、はいつ！」

「アタシはてめーらの夫婦漫才見てられるほど暇じゃねえんだよ。大体よ、シメてこいってのは依頼じゃねえ。命令だ。ま、とりあえず時期は追って話す。それまでに体慣らしとけ。以上。あ、それとあとひとつ。今のリーダーは『カクキワキクカ』とかいう名前らしい。一応覚えとけ」

現在、学校からの帰り道。

さつきです。

あたしとうにやは帰りながら、愛葉について話していました。しかし、愛葉の今いる場所がわかるわけもなく、途方に暮れるまま。3日前の睦美さんの話を思い出すと、また憂鬱になってきます。

「カクキワキクカ、だっけ。今のリーダー」

「らしいな。たしか愛葉の机の中に入ってた紙切れにも、角木和菊花って書いてあったような」

「え、ホントに！？ じゃあやっぱり、愛葉さんは妙なことに巻き込まれてるんじゃないの！？」

「……………どうだろ。でも、かといってスケアスレットの本拠地を見つけるのもあてが……………あ」

「ん？」

あたしが何気なしに見ていた前方に映った、2つの影。あれは明らかに見たことのある、しかも今必要としているものだった。

「いーもん見つけた」

「へ？ 何の話……………ってちょっとさつき、一体どこ行くのよ！」

「まあまあ。うにゃは待つてなつて」

喚くうにゃをなだめて2つの影の方へ。

「ねえ、少年たち？」

「あ、なんだおばさ うわっ！？」

「あんたはいつかの！」

「ちょっと話をしたいんだけどさあ……………」

そう言いながらあたしが足をふつてみせると、顔を青ざめる少年たち。あのいたみはまだ忘れてなかったみたいだね。

「え、えっと、なんででしょうか」

「お、なんか急に下からになったね。まあいいや。とりあえずさ、あんたらの本拠地っての？ 教えてくれない？」

「は？ 本拠地？ 一体何を言ってるのか……」

「おいおい、しらばつくれても無駄だぜ？ そのネックレスのトップ、スケアスレットのもんだろ？」

その名前を出した途端、また少年たちは顔色を変えた。しかも今度はかなり汗をかいてるみたい。分かりやすい奴らだなあ。

「えっと、いや、その……」

「言った方が楽になるよー？」

そう言いつつ、今度は思いっきり足で空を蹴る。それを見て少年たち、また顔面蒼白。

「……………つ、ついてきて下さい」

「お、こりゃ親切にどーも。おーい、うにゃー」

うにゃも呼び寄せて、あたしたちは親切な少年2人に連れられ、スケアスレットの本拠地へ。本拠地といっても別に大したものではなく、よくドラマとかで見る悪ガキどもの溜まり場といったものだった。

た。

見渡すと、10人ぐらいの中学生らしき少年たちがこちらをずつとにらんでいる。まあ言ってみりや蟻の巣に蜂が入ってきたようなもんだ。睨みたくもなるだろうな。

「で、あの、ご用件は……」

「ああ、角木和とかいう奴に会わせてくれ」

「か、角木和……リーダーですか!？」

「うん」

「うんって軽っ! いやリーダーに会わせるには色々と……しかも今ちよっとゴタついてまして」

「だあからよお、あたしたちはそのゴタつきを解消しに来てやったんじゃないかよ。ほら、どーせ奥にいるんだろ? うにゃ、行くぞ」

「まったく勝手ねえ。ま、いつか。行きましょ」

「ちよ、ちよっと!」

「オイ待てや!」

「ん?」

あたしとうにゃがサラッと奥に入っていこうとすると、ゴツめの兄ちゃんに阻まれた。物凄い形相 と言っても、怒っているというよりは焦っているような をしている。

「ここを通るんなら、俺たちを倒してからにしろ」

そんな映画やドラマで聞きあきたセリフを言われてテンションの上がるあたしに対して、うにゃはいたって冷静に対処しようとする。

「ま、まあまあ。別に私たちもあなたたちと殴りあいをしに来たわけじゃないから」

「や、でもいつペンシメてこいつで睦美さんに言われたじゃんか」

「ちよっ！　なんであんたはそう余計なことを！」

「……俺らをシメる、なあ？　俺らはここらじゃ最強のグループ、スケアスレットだぞ！　なめてたら痛い目見んぜ？」

「へえ……痛い目ってどんな目か見てみたいなあ」

ふざけたようにあたしがそう言うと、ガタイの良い兄ちゃんはブチツとキレちゃったらしく、唸り声をあげながら走ってきた。それに連られるようにして周りの少年たちも走ってくる。その瞬間、あたしはポケットから小さい缶を取り出し、うにゃの口元へ。中の液体を一気に飲ませた。

「わ！　ち、ちよっとさつき、あんたにゃにを……ふえ？　……あんだよここどこだよ？　うるっせえなガキ共が！」

「よっしやうにゃ、いくよー」

あたしがうにゃに飲ましたのは缶ビール。シラフだと相手に気を

使って殴れないから、よく中学の頃も喧嘩の時はこの方法をとったものだった。

「うおりゃあああー！」

しかも酒の入った時のうにやはやたらと強い。散々暴れまくって、結局ほとんどをうにやが仕留めてしまった。あ、仕留めるってもちろん息の根を止めたわけじゃないからね？

一瞬でカタがついてしまって『あつけないなー』と思つてると、奥からまた2つの影が出てきた。真打ち登場か？ とあたしがわくわくしながら見ていると、どうやら違つたらしく、その姿はまた見たことのあるものだった。

「…………愛葉」

「せ、先生！ どうしてここに…………つてこの周りの人たちは？」

「え、いやまあ何か色々あつて倒れた。それよりお前、大丈夫か？」

「…………？ 大丈夫って何がです？」

「いや、お前この3日間、捕まつてたんじゃねーのか？」

「は？」

と、あたしたちがどうも噛み合わない話をしていると、奥からまた中学生らしき女の子が出てきた。あれがもしかして……

「オイ、お前、角木和菊花か？」

「へっ？ あ、はい。そうです」

「ん？ いやに丁寧だな」

「いや、これには色々事情が……」

ますます話がわからなくなっていく中、さっきのしたはずのゴツい兄ちゃんはずがに夕フなのか、急に目覚めた。そして角木和の姿を確認するや否や、瞬時に近づいてきた。

「あ、アネゴお」

「ひゃい！ い、いや、私はアネゴなんかじゃないですう！」

「……え？」

本当に意味不明な状況だったが、この件は丸く収まる。根拠はどこにもなかったが、あたしには何故かそう思えたのだった。

第23話 先生なんてもの

「コーヒーひとつ」

「チキンカツ定食」

「ドリンクバーを」

「えっと、それじゃああんみつをいただくかしら」

「あたしチヨコパフェ!」

「えっと、ドリンクバーで」

「うちはどうしようかな……ここはパフェ、いやでも夕方なってきたお腹も空いてきたし、けど食べて帰ったらお母さんに怒られそう、かといってドリンクバーっていうのも……」

「ご注文は以上でよろしいでしょうか?」

「はい」

「え、ちょっとさつき先生、うちまだ決めてへんのにー」

「おせーんだよ。また後で注文しろ。だいたい付いてくんたつたつたろ」

「まあいいじゃんいいじゃん。細かいことは言いつこなしたよさつきちゃん」

……はあ。のっけからごちゃごちゃとすいません。さつきです。
愛葉と角木和から話を聞こうとしたところ、話がややこしいとの
ことで、それじゃ喫茶店にでも行くかと歩いていると、道端でより
によって日和、乙香、まーちに出くわしてしまったのだ。そして案
の定喫茶店まで付いてきたというわけ。正直、かなり狭いというの
が素直な感想である。

「いやー、それにしてもラッキー！ 喉乾いたーって思ってたらさ
つきちゃん達に会っておごってもらっちゃうなんてさ！」

「は？ 何言ってるんだ？ あたしらの分はつにゃ持ちだけど、お前
らは自分で払えよ」

「いやいやあなたが何言ってるのよ」

「えー！ つにゃちゃん、あたしたちの分も払ってよ！」

「払わないわよ。ってつにゃちゃんって何よ！？」

「まあまあつにゃ。そう興奮しなさんな」

「だいたいあんたがつにゃつにゃって学校で言いまくるから！」

「あの……先生？」

「何よ！ あ、愛葉さん。ごめんなさい、ちょっと取り乱したわ」

「ちょっとじゃないだろー、と思ったけど、さすがに言わないでお
いた。これ言ったらまた怒られそうだしね。」

「ま、雑談もほどほどにして、本題に移るぞ。とりあえず今回の件について愛葉に説明してもらおうか」

「あ、はい」

あたしがそう言って愛葉の方を見ると、礼儀正しく返事をしてうなずいた。

「話すと長いんですが、まあまずはつきりさせたいことから言っと、き……菊花はスケアスレットのリーダーなんです、リーダーじゃないんです」

「全然ハッキリしてないぞ。すげえうやむやじゃねえか」

「いえ、言い方が悪かったですね。実は、スケアスレットというグループは代々、女性がリーダーをする伝統があるらしいんです」

「ああ……よく知ってるよ」

だってそのルール、睦美さんが作ったものだし。

「それですね、スケアスレットにはハッキリ言って今、女性は一人しかいないんです」

「……なるほどね。それがこの角木和、というわけか」

「そうなんです」

「……わたくし、リーダーなんてできやしませんわ」

ふむ。さつきから気になってたんだが……

「角木和、お前のそのしゃべり方、すげえ良いとこのお嬢様みたいなんだよな。そんなお前がなんでスケアスレットみたいなグループに入ってるのかがまず謎なんだが」

「あ、それはですね……言ってみれば、その、鍛えるため、と言いますか。色々な経験を積み、と父に言われたものですから」

「……それであんな暴走族に、ねえ」

「いえ、初めは優良なんとかグループとか聞いたんですよ？ でも入ってみたら何やら内部抗争がどうとか次期リーダーがどうとか言われて急にリーダーにされちゃいますし、大変でしたわ」

「ふうん……」

そこでチキンカツ定食が来たので一旦会話を止める。ふと横を見ると、何やらうにゃが頭を抱えている。

「うにゃ、どしたの？」

「いや、実は何か頭が痛いよね。そういえば30分ほど前の記憶がイマイチ曖昧だし……まるでお酒を飲んだみたいに」

「……ふ、ふうん」

冷や汗をかきつつチキンカツをいただく。……味がわからん。5分もしないうちに食べ終わると、話の続きを聞くことに。

「で、まあ角木和の事情はわかったが、そうなると愛葉、お前が何で3日休んだのか、あと角木和とはどういう関係かとか聞かせてもらうか」

「どういう関係、と言われますと……ご近所さんでして、前から多少の面識はあったんですが、まともに喋ったことはなかったぐらいの関係だったんです。ですが前から親同士はすごい仲が良かったみたいで、親づてに聞いたんです。角木和さんが最近ブイブイ言わせてるから様子を見てくれ、って」

「ブイブイ、って言わんだろ今時……」

「ってか唯ちゃん！」

あたしが妙なところにツッコミを入れていると、愛葉の話聞いていた角木和が急に立ち上がった。……唯ちゃんって誰だよ。

「私のことは菊花って呼んでと言ったでしょう？」

「え、あ、ごめん。まだやっぱり恥ずかしくて……」

愛葉、お前か！ お前、愛葉 唯って言うのか！ 可愛い名前だな！

と、あたしが心の中でツッコミを入れていると、それとは対称的に全力で日和が笑う。

「愛葉ちゃん、照れてんの？ 可愛いー」

「う、うるせえ黙れ死ね！」

「え」

「え？」

「え、いや……え、え？」

「あ、今は……な、流れで」

「まあ日和相手だからしかたねえよ、うん」

「え！？ なんでささつきちゃん！」

「いやだつてお前」

「はい！ うちコッペパンで！」

「そんなもんあるわけないでしょ！ 学校の給食じゃないんだから！」

何やらいつもどおりやかましくなってきたところで、あたしだけに聞こえる程度の声で、愛葉がいった。

「これ……なんですよ」

「え？」

「……私が学校を休んでた理由。そりゃ菊花といっしょにいてやらなきゃ、とは思ってましたけど、それよりも……学校にこうやって騒げる友達がないのが一番嫌なんです。私、初めて喋った人には

すごくキツく当たっちゃうから。菊花は初めてまともに喋ることができた相手なんです」

「……なるほどねえ」

絞り出すようにして発していた声はそこで途切れ、愛葉は下を向いてしまった。

「あたしよお、先生なんてのは金のために仕方なくあたしらに構ってるもんなんだと思ってたんだよ。ハッキリ言ってこの前までもそう思ってた。でもな、愛葉。お前からどうやったら話を聞けるかとかお前とどうやったら打ち解けられるかとか色々考えてるうちによ、それは違うなーって思ったんだよ。まだあたしなんて教師やって3ヶ月程度しか経ってないし、偉そうに先生のこと語れるような身分じゃないけどな……って寝てんのか？」

散々べらべらと喋ったのだが、どうやら愛葉は下を向いたまま寝てしまつてたらしい。ま、あんな恥ずかしい演説、聞いてもらわない方がいいか。

椅子にもたれて、みんなの方を見る。わあわあど騒ぐ日和、乙香、まーち、さらにはいつの間にか仲良くなつたらしい菊花。その話を聞いて呆れつつも笑顔のうにゃ。それと、愛葉と、あたしと。こんな風景を見ていると、「先生」なんて決まりは、いらなんじゃなにかと思う。

「もういつそみんな友達でいいじゃん、なんて」

呟いてみて、愛葉の方を見る。思い過ごしかもしれないが、たしかに、少し微笑んだように見えた。

それを見て、自然と笑顔になるあたしがいたのだった。

「わ、さつきちゃん、何ニヤニヤしてんの？」

「ニヤニヤってなんだ！」

「しかも愛葉ちゃんの方見てたで？ これはどづいづいとや」

「ま、まさか……さつきちゃんが愛葉ちゃんに、恋！？ ラブ！？」

前言撤回。やっぱりこいつらとは友達にはなりたくない。

「……んなわけねえだろうがああー！」

第24話 極道系美少女菊花

「おっはー!」

「おはよ」

「おはよ〜」

「おはようございます日和さん」

「……………」

おはようございますみなさん。日和でございます。

今日も元気よく登校してきたわけなんです、なんとというか友達も増えたなあというのとみんな様々なあいさつをしてくれるなあというのがわかった今朝ですね、はい。あ、ちなみに菊花ちゃんはこの学校の生徒になったみたいです。話すとき長いので簡単に言うと、まあ転校してきたようなものですね。

「っていうかあ、チヨベリバ!」

「いつの時代の言葉だよ」

「ちよべりば……………? なんか、まがまがしい響きやな」

「超ベリーバッド、の略ではないでしょうか?」

「……………」

「ってか何がチヨベリバナのよ？」

「愛葉ちゃんだよ！」

「…………お、オレか？」

「…………へ？」

「へ？」

「え、いや今なんて？」

「いや、オレがどうしたって」

「いやいやいやいや。一人称オレはダメだよ愛葉ちゃん」

「そうや。男か女かわからなくなる」

「いや、それはわかるだろ」

「う、うっせえなお前ら！ 何をどう言おうがオレの勝手だろうが
「！」

「でもさ、それじゃなんというか…………ホントに男みたいだよ？」

「そうやそうや。どちらかというとなよりの男や」

「いや、まず男か女かの話なんかしてないでしょ」

「だ、黙れ！ オレは女だ！ 誰がなんと言おうと！」

「ま、まあまあ、唯ちゃん落ち着いて」

「そうそう落ち着いて唯ちゃん」

「せやせや。唯ちゃん落ち着かな」

「あんたら怒られるよ？」

「う、う、うるせえええ！ 唯ちゃん唯ちゃん言うなあ！」

「うわああんと言いながら廊下へ走り去る愛葉ちゃんもとい唯ちゃん。面白いキヤラしてるなあ。」

「あたしがそんなことをぼーっと考えてるうちにチャイムが鳴ってさつきちゃんが教室に入ってきた。」

「おーっす。仕方ないから今日も元気よく……あり？ 愛葉がいない？」

「や、さつきちゃん、実は」

「お、遅れてすみません！」

「声のする方を見るとせえせえと肩で息をする唯ちゃんが扉のところに立っていた。さつき出ていったばかりなのに大変だねえ。」

「なんだお前、また息切れして。運動不足？」

「す、すみません……ちょっと走ってたもんで」

「え、お前陸上部？」

「い、いや、そうではなくてですね」

「ふーん。まあいいや。座ってー」

「ゼエ……ゼエ……は、はい」

そんなこんなで今日も授業が始まった。あ、今日は1時間目からさつきちゃんの授業だ。

「そんじゃま、このまま授業に入るか。ええと、前どこまでやったっけ……」

「あの、篠塚先生？」

「あれー？ どこだったか全然わかんない……」

「あ、あの！ 篠塚先生！」

「ん？ え？ あ、あたし？ あ、そっか。篠塚先生だよな。日和を始め生徒がみんな下の名前で呼ぶからよお……」

「いや、あの、わたくしは自己紹介などはしなくても結構なのでし
ようか？」

「はあ？ 自己紹介？ 何でそんなもん……あ、そっか。お前転校生だったな。思いっきり忘れてた」

……なんとというか、さつきちゃんらしいっちゃあさつきちゃんらしいというか。ま、こっちのが唯ちゃんが来てなかったこの前みたいにピリピリした感じよりはいいかな。

「えー、それではこいつの紹介をする。名前は角木和菊花。あと…
…金持ち。以上！」

なんてテキトーかつ適当な紹介！ 菊花ちゃんだからだろうけど、他の人に今の見られたら大変だよ。それでなくとも年齢ごまかしてるのに。

そんなテキトーな紹介にも構わず菊花ちゃんは笑顔で立ち上がり
教卓に。

「ただ今ご紹介にあずかりましたたくし、角木和菊花と申します。
みなさんさえよろしければ菊花と呼んでくだされば嬉しいです。ど
うぞよろしくお願いいたします」

なんて丁寧な挨拶！ すっごいお嬢様オーラ漂ってるし、みんな
一気に見る目が変わったね。

「あ、ちなみに角木和は京ヶ咲中学から転校してきたんだっけか」

「はい、そうです」

それを聞いて教室がどよめく。たしか京ヶ咲中って言ったらすっ
ごいお嬢様学校だって聞いたことがある。やっぱお金持ちなんだなあ。

「そんじゃ、角木和に質問あるやつー」

「はい！」

まあここはみんなから親しまれるように、あたしが質問しといてあげないとね！ というわけで速攻撃手。さつきちゃんが嫌な顔しただけど関係なし！

「……はい、日和」

「よし」

で、手を挙げたはいいけど、何を聞こう……あ、そだ。

「えーと、何でここに転校してきたんですか？」

「あ、それは、京ヶ咲中学を退学になったからです」

「えー？ あ、あの……な、なんで？」

「いえ、それはわたくしが暴走族と関与していたからですわ」

「あ、え、あ、そっか」

その瞬間、またしても明らかにみんなが見る目が変わった。さつきまでは『羨ましい』とかそういうのだったけど、今度は確実に『恐怖』の目で見てるよね……

「んじゃ他に質問あるやつー？」

しん、と音が聞こえてきそうなほど教室は静かになってしまった。これ、あたしのせい？

しかしそれにも構わず菊花ちゃんはニコニコしてる。

「ごいませんようでしたら、これにて自己紹介は終了とさせていただきますね。よろしくお願いいたします」

パチパチパチパチと恐怖混じりの拍手。な、なんかあたしが溝を作っちゃったような気が……い、いや気にしない！

とは言いつつも、なんとも言えない嫌な気分が残ってたので、授業が終わってから謝ることに。

「どうしたんです、日和さん？」

「いや、あのさ、さっきは変な質問しちゃってごめん！」

あたしがそう言つと、菊花ちゃんはきょとんとした顔をしました。

「なんで謝るんですか？ 別にわたくしは全く気にしてませんよ？」

「え……でも、やっぱなんか悪いから、償いというか落とし前というか……」

「そんな！ 小指なんて結構ですわ！ 勉強に支障をきたしますもの」

「……え？」

これを聞いた瞬間、あたしが言わなくてもいずれみんなわかることだったんだな、と思って安心したあたしでした。

「小指をつめるためのドスは今持ってませんし……どうしても言うならハサミでもなんとか」

「さあ、遠慮しなさいませ」

第25話 桜馬家の事情

どうも、乙香です。

只今午後4時、学校から帰ったところなんですが、今日はなんとまーち、日和、愛葉さん、菊花ちゃんがうちに来てるんです。まあ日和は数えきれないほどうちに来てますが、実は日和以外はまーちも含めて誰もうちに来たことがないんですよ。そんなわけで、うちの家族とはみんな初対面、のはずなんです。

「おなかすいたー！」

「おじゃまします」

「えらい大きい家やなー」

「おじゃましますわ」

「おお、いらっしやい」

みんなそれぞれ挨拶しながら入ってきたところに、突如姉が現れたのです。しかもこの姉がなんと……

「あ、初めまし……て？」

「あれ？ うちこの人見たことあるで」

「いや、オレもあるけど……」

「わたくし、ほんの一週間ほど前にお会いしたばかりですわ」

「あ、いや、みんなそれは勘違いじゃ」

「あら？ みんなうちの生徒か？」

「うぎゃああああ！ ついに、つてか即座に言った！ 出てきてすぐにバラしたよこの人！」

「え、うちの生徒……つて、あ！ そうだ、この人たしか全校朝礼で喋ってた人だ！ なんか勉強なんてしなくても生きていけるとか」

「教頭に向かってズラやて言うてたな」

「わたくしが入学手続きした時は名前だけ言つて終わりましたわ」

「いや、だってアタシ校長だし」

「いやいやいやいや！ 今のおかしいでしょ！ いろいろとおかしかったよ今の！ つてか、ちょ、お姉ちゃん一旦帰つて！ 部屋に帰宅して！」

「なんでだよめんどくせえな。玄関はアタシの領域なんだよ。テリトリーなんだよ」

「番犬か！ はよ帰れ！」

「んだようるせーな。しゃーない。また後で邪魔するよ」

「せんでいいー！」

うだうだと言っているお姉ちゃんを部屋に帰して、状況が掴めずに唖然としているみんなを見る。

「え、えっと、何から説明すればいいのかな。とりあえず、あれは私の姉。たぶん日和も会うのは初めてよね」

「うん。ってかお姉ちゃんがいるなんて聞いたことなかったし」

そりゃ言わなかったからね。あんな姉がいるなんて知れたら嫌だしね。

「で、まあとりあえずあの姉、睦美って言っただけど、あれはうちの中学の校長をしてるの」

「校長の妹ねえ……ってことはだいぶ離れてるんじゃないのか？」

「いや、それが……」

「……まさか」

「……そうなのよ。そのまさかなのよ」

あたしと日和はそれだけでわかるのだが、他の3人はもちろんわからないわけなので……かくかくしかじかと説明。

「つまり、篠塚先生は18歳なのに22歳と偽って教師をしております乙香さんのお姉さまも同じように年齢を詐称してらっしゃると」

「まあそゆこと」

「えっと、つまりやな、ひよこがひよこやのに鶏やて言っようなもんやな？」

「いみわかんねーよ」

「で、あの校長は今いくつなんだ？」

「今年で八タチかな。さつき姉ちゃんとは1つ違いなんだって」

「え？ さつきちゃんと知り合いなの？」

「らしいよ。なんとかってグループの先輩後輩だとかで。だいぶ前に聞いた話だから覚えてないけどね」

そこまで話したところで、玄関に立ち尽くしていたことを思い出した。話をするのならリビングでも行けばいいか、ということでもんなでリビングへ。ドアを開くと、誰かがソファに座っていた。

「あ、お兄ちゃん」

「ん？ おお、乙香……と、友達か？ いらっしやい」

「おじやまします」

みんな口を揃えてそう言うてから、お兄ちゃんをまじまじと品定めするかのようにつめ。

そして菊花ちゃんが近づいて耳打ちしてきた。

「この方はどのようにおかしんですの？」

「いや！ うちの人みんなおかしいとかそんなルールは別にないからね？ 私も普通だしさ！」

「いつちゃんは普通じゃないでしょー」

「乙香ちゃんが普通やったらあたしはどうなるんや」

「お前らが異常なんだよ！ ね、愛葉さん？」

「えっ、私ですか……？」

……誰？

「え、いや、あの、愛葉さん？」

「私がどうかしたかしら？」

「な、なんで菊花ちゃんの物真似してんの？」

「いえ、なんてことないです。いつもどおりですわ」

……き、気持ち悪い。こんなこと言ったら失礼だけど、ものすごく気持ち悪いよ！

「な、なんでいきなり」

「乙香、どうかしたのか？ その子、体調でも悪いのか？」

「あ、お兄ちゃん、なんでも」

「大丈夫ですわ、お兄様。心配おかけしてすみませんわ」

「あ、そうかい？ そんなじゃ僕は部屋に戻るけど、また何かあったらなんでも言いなよ？」

「ありがとうございます、お兄様」

「……………あ、えと」

何が起こったのかわからない私たちはしばらくその場に立ち尽くしていました。私にただひとつわかったことがあるとすれば、愛葉さんはなんかすごいということだけでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2928m/>

ゆとりろ！

2011年3月10日16時23分発行